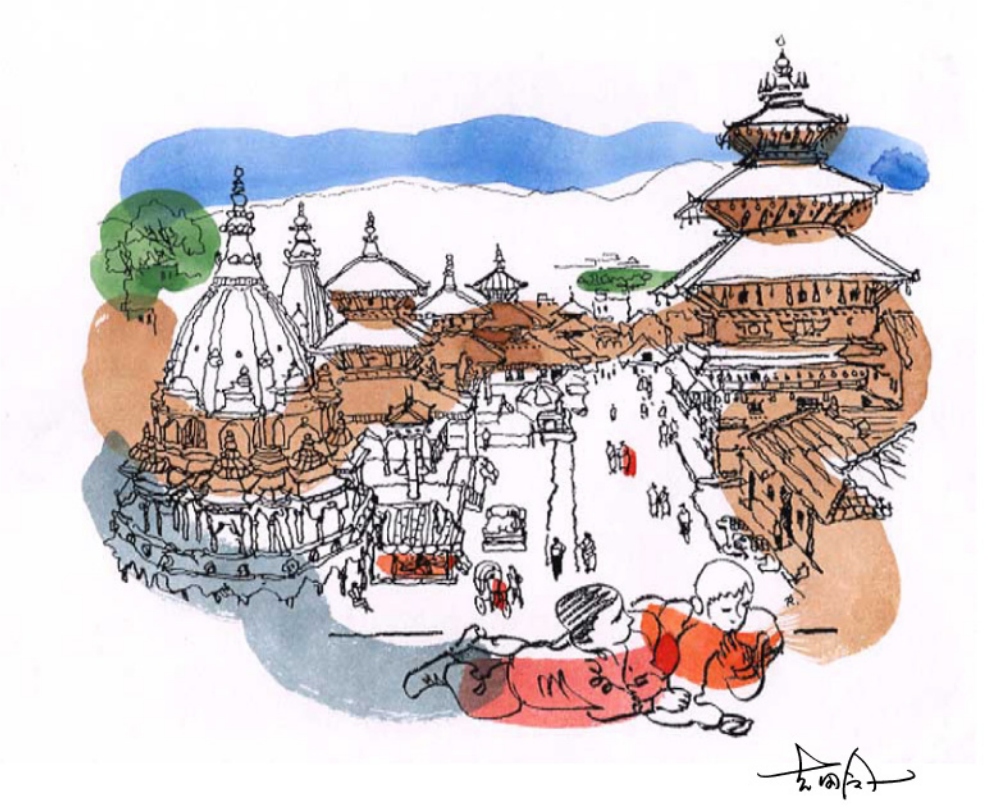
仏教用語集

竹下 博 編著



仏教用語集

竹下　博　編著

ブッダの旗と子供たち
（ネパールのブッダ降誕祭）

無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも値遇こと難し。

われ今見聞し受持することを得たり。

願わくは如来の眞實義を解したてまつらん。

愛語

やさしい言葉ということ。

愛染明王

密教で信仰されてきた五大明王のなかに愛染明王がおられます。

愛染とは、ものごとに愛着し、それにとらわれて染る心という意味です。

愛染明王は人間の愛欲と貪染の心をそのままで悟りの世界へ導くみ仏であります、経典には、金剛薩捶とか、金剛王、金剛愛菩薩の化身が愛染明王だとあります。

愛欲の広海に沈没し

恩愛・貪欲の煩悩の深きことをいう。

愛論見論

正しくない無益な言論をいう。

愛論は愛着により起こる誤った言論、見論は道理にくらい偏見による言論。

悪（あく）

生命（せいめい）のあたりまえの歩（あゆ）みを止（と）めること、またはあとへもどること。

悪事（あくじ）

いろいろな悪（わる）い行（おこな）い。

悪邪無信盛時（あくじゃむしんじょうじ）

五濁（ごじょく）が盛（さか）んになり、仏法（ぶっぽう）を聞（き）いても疑（うたが）いそしるばかりで信（しん）じないものが多（おお）くなる時代（じだい）のことをいう。

悪耳（あくに）

迷（まよ）いの心（こころ）。

悪人成仏（あくにんじょうぶつ）

どんな悪人（あくにん）にもかならず仏性（ぶっしょう）はあるのですから、仏（ほとけ）の法（ほう）に触（ふ）れて魂（たましい）の表面（ひょうめん）にかかっていた曇（くも）りがぬぐわれていけば、中（なか）からほんものの自分（じぶん）、すなわち仏性（ぶっしょう）が輝（かがや）きだしてくるのです。

阿閦仏（あしゅくぶつ）

梵語（ぼんご）アクショーブヤの音写（おんしゃ）、無動（むどう）、無瞋恚（むしんし）と漢訳（かんやく）する。東方（とうほう）の現在仏（げんざいぶつ）。昔（むかし）、大日如来（だいにちにょらい）のもとで発願（ほつがん）・修行（しゅぎょう）し、一切（いっさい）の瞋恚（しんし）と淫欲（いんよく）を断（た）つことを成就（じょうじゅ）して、正覚（しょうがく）を得（え）、今現（いまげん）に妙喜世界（みょうきせかい）にあって説法（せっぽう）しているという。

阿僧祇（あそうぎ）

梵語（ぼんご）アサンキヤの音写（おんしゃ）。数（かぞ）えることのできないの意で無数（むしゅ）・無央数（むおうしゅ）と漢訳（かんやく）する。大（おお）きな数（かず）の単位（たんい）を表（あらわ）す。

阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみゃくさんぼだい）

「阿耨多羅（あのくたら）」――梵語（ぼんご）「アヌッタラ」という言葉（ことば）を音写（おんしゃ）したもので、「アヌ」は「ない」「ウッタラ」は「上（うえ）」という意味（いみ）ですから「阿耨多羅（あのくたら）」で「この上ない」という意味になります、「三藐（さんみゃく）」――「サミャク」、これは同（おな）じとか「正（ただ）しい」ということです、中国（ちゅうごく）の仏教家（ぶっきょうか）は「正等（しょうどう）」と訳（やく）しました。

「三菩提（さんぼだい）」――「サムボードヒ」、「サム」は「完全（かんぜん）な」、「ボードヒ」は「覚（さと）り」ですが、ふつうには、「完全（かんぜん）

な覚り」とはしないでただ「覚り」と訳しています。

以上で「この上なく正しく等しい覚り」――「正しく等しい覚り」というのは、時間とか、条件とかによって動くことのない、ほんとうの智慧ということです。

・無上正真道

無上正遍知などと訳されますが本来は原語（梵語）の発音そのままの呪文であって、なぜ中国語に翻訳しないでそのままになっているかといえば、翻訳者羅什の深い心づかいによるものです。

阿毘跋致

仏になるべき身となるとなり。

阿弥陀仏（如来）

お釈迦さまは、「無量寿経」というお経の中で、こう話されております。

昔々一人の国王がいた、ある日、その国王が世自在王仏の説法を聞いて感激し、自分もこのような仏となって人々を救おうと決意し、王位を捨てて僧侶になった。

それから大変な修行をして、とうとう仏の次の位の菩薩になった、そこでその菩薩（法蔵）は仏になるために四十八の願いをたて、「もしこの願いが成就しなければ、私は仏にはならない」と誓った。

その四十八願の中の第十八番目の願いに、もし私が仏になったならば、誰でも心の底から、私のいる極楽浄土に生まれたいと念願して、たとえ十遍でも私の名をとなえれば、必ず極楽に救いとる。もし一人でもこれに洩れるようなことがあれば私は仏にはならないというのがある（摂取不捨）。

それからその菩薩はまた長い長い間修行をし、ついにその誓いを成就して仏になった。

その仏が阿弥陀仏である。

諸仏が持っている「如来の智慧」の本源をなす智慧が阿弥陀仏である、その無量寿仏の「威神光明」が「最尊第一」である様子について、経典（無量寿経）に十二の特徴をあげている。無量寿仏をば、無量光仏、無辺光仏、無碍光仏、無対光仏、炎王光仏、清浄光仏、歓喜光仏、智慧光仏、不断光仏、難思光仏、無称光仏、超日月光仏と号す。

阿弥陀仏の五智

1、仏智
2、不思議智
3、不可称智
4、大乗広智
5、無等無倫最上勝智

阿羅漢（あらかん）
すべての煩悩（ぼんのう）を除（のぞ）きつくした者（もの）。

異（い）
ものごとが変（かわ）っていくありさま、変化（へんか）することです。

意安楽行（いあんらくぎょう）
心（こころ）の持（も）ちかたについての八つの戒（いまし）め

易行（いぎょう）
平易（へいい）な行法（ぎょうほう）。
阿弥陀仏（あみだぶつ）の本願（ほんがん）を信（しん）じて念仏（ねんぶつ）すること。

易行道（いぎょうどう）
阿弥陀仏（あみだぶつ）の本願力（ほんがんりき）によって浄土（じょうど）に往生（おうじょ）してさとりをひらく他力（たりき）の道（みち）。

易行の一門

自力の行によらないで阿弥陀仏の本願力によってさとりを得る浄土門のこと。

一時聲欬

「然して後に還って舌相を摂めて、一時に聲欬」とあります。

これにはどんな意味があるかといいますと、声を出すというのは、教えを説くということを表しています。そこで、すべての仏さまが一時に咳ばらいをされたということは、すべての教えは一つに帰するという意味なのです。（万教帰一）

一乗

結局「みんな仏になれるのだ」ということです。

一定

確かに定まったこと。

一乗究竟の極説

一切の衆生をことごとく仏のさとりに導く、一乗教の究極を説きあらわした教え。

一乗大智願海

一切の衆生をことごとく仏のさとりに至らせる、この上なくすぐれた阿弥陀如来の智慧の誓願のこと。

一乗法華の妙典

一乗の理を明す「妙法蓮華経」のこと。

一念一心

一念は信心のおこった最初の時、一心は二心（疑い）なく阿弥陀仏の仰せにしたがう信心のこと。

一念歓喜

本願を聞いて二心なくよろこぶ信心のこと。

親鸞聖人は、一念とは信心を得る時のきわまり、歓は身を、喜は心をよろこばせることと、いわれている。

一念喜愛心

一念の信心の内容をあらわす。

すなわち阿弥陀如来の救済を喜び愛でる心。

一念慶喜

二心なく、疑いなく所聞の法をよろこぶ。

一念三千

われわれの心というものは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、という六界をグルグルまわって、苦しみや悩みの尽きることはありません。

ところが、凡夫の心の中にも、ときおりは聖者のような念の湧くことがあります。

すなわち正しい道を学ぼう（声聞）とか、何か経験によってハッと正しい道を悟（縁覚）とか、人のため世のためにつくそう（菩薩）というような心のはたらきが起こります。

あるいはほんの希には、自分というものを、すっかり忘れた絶対慈悲の心（仏）になることが、ありましょう。

そこでいま述べた凡夫の六界およびその上の聖者の四界を合せた十界についての教え。

一念信解

仏の寿命の無限であることを、ほんのちょっとのあいだでも「なるほどそうだ」と信解することです。

一念多念

一念義とは、浄土往生は信心ひとつで決定する、またはひと声の称名で決定するとし、その後の称名を軽視する説。

これに対し、多念義とは、浄土往生は一生涯数多くの念仏を称え、臨終来迎をまって往生が決定するとする説。

一念発起

疑いなき信心がおこること。

阿弥陀如来の本願を信ずる心が初めておこること。

一念発起正定之聚

すなわち往生を得、不退転に住す。

一念無疑（いちねんむぎ）

阿弥陀如来の本願を二心なく疑いなく信じること。

一仏乗（いちぶつじょう）

「いや、仏の教えに大乗も小乗もない、ただ一乗しかないのだ。みんな仲間同志のけんかはやめて、この一乗に従おうではないか。釈尊が『これこそ、いちばんすぐれたものだ』といってお説きになった最高の教え、真実の教えは、この法門だったのだよ」といって書きあらわされたのが、ほかならぬ「法華経」だったそうです。

一味の安心（いちみのあんじん）

阿弥陀仏より、ひとしく回向された安心であるから、人に応じてその内容が異なることなく同一であること。他力の信心の平等であること。

一切種智（いっさいしゅうち）

・完全なさとりの智慧、あらゆるものの実相を知りきわめる智慧。
・一切の存在について平等と差別、空と有を不二一体に悟りつくす仏の智慧。

一切衆生悉有仏性（いっさいしゅじょうしつうぶっしょう）

生きとし、生けるものには、すべて生まれながらにして仏となる種（仏性）があるということ。

一切智（いっさいち）

阿弥陀如来のこのうえない智慧。

すべてのことがらの真実を知る智慧。

一生補処（いっしょうふしょ）

・菩薩の最高位

・一生だけすぎれば次生は仏の位につくという身。

一心一向（いっしんいっこう）

他の仏や余行に心をかけず、もっぱら阿弥陀仏を信ずること。

一心専念（いっしんせんねん）

阿弥陀如来の本願を信じてもっぱら称名念仏すること。

五つの音声

宮・商・角・徴・羽の五音。

威徳智

すぐれた徳をそなえた智慧。

威容顕曜

姿が荘厳で、光り輝いていること。

因果

物事が起こる原因となるものを因といい、それによって引き起こされた結果を果という。ただし、仏教では物事がおこる原因には、果を生じさせる直接原因である因と、因を助成する間接原因である縁があるとし、因果というときの因は、因と縁を含めているのである。

この因と果を合せて因果という。

因行果徳体（いんぎょうかとくたい）

念仏には阿弥陀仏の果上の徳がおさまる果分の行であるが、諸善は仏になるために積む因分の行である。

因行果徳対（いんぎょうかとくたい）

諸善はさとりに至る因位の行であり、念仏は阿弥陀如来が因位の行を積まれて成就されている果上の徳である。

婬洙（いんしつ）

みだらな欲望。愛欲のこと。

引接（いんじょう）

浄土へ導きいれること。

引導（いんどう）

迷える衆生を悟導に導くこと。

因位（いんに）
因地ともいう。
因の位という意で、果位に対する語。
菩薩が仏のさとりをひらくために、修行している間をいう。
阿弥陀仏の因位の名を法蔵菩薩と呼ぶ。

因縁（いんねん）
因と縁。
結果をもたらす、直接原因（因）と間接原因または条件（縁）。
すべての存在は因と縁によって滅するものとする。
このように因縁によって事柄が生起することを因縁生とも縁起ともいう。

因縁の法（いんねんのほう）
一切の法は因と縁とが和合して仮に存在する実体のないものであるという道理。
縁起のこと。

有（う）

差別（さべつ）

有為（う い）

梵語（ぼんご）サンスクリタの漢訳（かんやく）。

さまざまな原因（げんいん）・条件（じょうけん）（因縁（いんねん））によってつくられた生滅変化（しょうめつへんか）するもの。

無為（むい）に対（たい）する語（ご）。

有為の心（う い こころ）

何事（なにごと）も自分（じぶん）を中心（ちゅうしん）にして考（かんが）える心（こころ）。

有為の法（う い ほう）

因（いん）と縁（えん）により生（しょう）じた諸現象（しょげんしょう）をいう。

有縁（うえん）

自分に関係のあるもの。

有縁の知識（うえんのちしき）
深い因縁に結ばれた仏道の師。

有学（うがく）
阿羅漢果まで至っていない聖者のこと。

有間心（うけんしん）
雑念のまじった心。

有後心（うごしん）
まだ後があると思うゆっくりした心。

有情（うじょう）
梵語サットヴアの漢訳、情（こころ）を有するもの。

生きとし生けるものの意。
旧訳では衆生、新訳では有情と漢訳する。

優曇華
優曇は梵語ウドゥンバラの音写、優曇鉢羅の略、優曇鉢華・優曇鉢樹ともいう。
雲瑞華と漢訳する。
桑科のイチジクの一種で三千年に一度だけ咲く花という。
仏の出世が稀なことや、めでたいことのおこる前兆を示す、喩えに用いられる。

有念
仏身・浄土の荘厳相など具体的に示された仏徳を観想すること。
仏の形相などを心に思いうかべて観想すること。

優婆夷
女の在家修行者

優婆塞（うばそく）
男の在家修行者

慧（え）
仏が一切のものの平等な面も知り分けておられること、すべてのものに共通の真理を見いだす力。

慧眼（えげん）
深い智慧によってものごとの本体といいますか、ものごとの真実のありかたといいましょうか、そう言うものを見分けることです、普通の人に見えないものや考え及ばないことを見通す眼。
智慧の眼。

慧解高遠（えげこうおん）
智慧をもって事理を了解することがすぐれていること。

回向（えこう）
「回向」というのは、「ふり向ける」という意味です。

すなわち、本来自分が受けるべきはずの功徳を、他へふり向けることです。

たとえば経典を読誦すれば、仏の教えが深く心に植えつけられ、魂がきよめられますから、もともと読経ということは自分自身の成道のためにする行であります。

ところが、これを祖先の霊前において行えば、自分が受けるべき功徳を祖先に「ふり向ける」ことになります。

祖先の霊の成仏を助けることになります。

だから、亡き人の霊前で読経することを回向というのです。

梵語パリナーマナーの漢訳。

回はめぐらすこと、向はさしむけること。

自ら修めた善根功徳を、自らのさとりのためにふりむける菩提回向、他の人々を救うためにふりむける衆生回向、空真如の理にかなっていく実際回向、の三種の回向がある。

回向利益他

衆生に功徳を施して利益を与えること。

回心

心をめぐらすこと。

心をひるがえすこと。

心を改めること。

自力の心を捨てて他力の信に帰すること。

回心懺悔

自力の心をひるがえして、悔い改めること。

回心の行

その行業を回向して往生を願わねばならない自力行のこと。

あるいは自力の心をひるがえして、他力に帰せねばならない自力行のこと。

回施

阿弥陀仏から衆生にめぐらし施されること。

回向に同じ。

えぞしらぬ
　とうてい理解できない。

依憑
　よりどころとすること。

慧目
　智慧の目

炎王光
　自在に照すさかんな光。

縁覚
　独覚ともいい、いろいろな出来事を縁として無常を知り、世間を離れて生活をして自分だけの悟りを得た人、いいかえれば体験主義の修行者。

縁起

あらゆる現象は、平等な、一種の、エネルギー（力）からできているということです。その「空（エネルギー）」が、ある条件（縁）によって寄り集まって、ある物質をつくっているのであって、その条件の違いによって、水ができたり、空気ができたり、石ができたり、人間の身体ができたりしているわけです。

そうして、その条件が変化すれば、その物質も分解して、ほかの形に変化します。水は、高い熱という条件に合えば、水蒸気となって蒸発し、その水蒸気が冷たい空気という条件に触れれば、雲となるのです。世の中のできごとも、心のはたらきも、やはりそのとおりであって、ひとつとしてこの法則に、はずれるものはないわけです。

この法則を、釈尊は「縁起」ということばでお説きになりました。

「縁りて生じ、縁りて滅する」というのは、「あることがらが起こるのも、ある物ができるのも、そのような条件（縁）があってこそ生ずるのである。

その条件（縁）がなくなれば、そのことがらも、その物も分解してしまうのである」という意味です、これこそ、宇宙のあらゆる存在と現象をつらぬく真理であって、実に、科学がこれ以上深くはいっていけないところまで、釈尊は直観によってみとどけておられるのです。

縁起観

釈尊は、人間を中心としたこの宇宙というものを、神がつくったとか、神が支配しているとか、いうのでなく、すべて縁起の関係によって観じておられるのです。

縁起とは因縁であり、もっとくわしくいえば、因・縁・果・報です。

この世の中には、いつも変らず定まった形で存在するものはひとつもない。すべてのものはある原因（因）があって、それがある条件（縁）に合ったとき、その結果がある現象（果）として現れるのである。

そしてその「果」は、かならずあとあとまで尾を引くはたらき（報）を残すものである。――釈尊は世の中のすべてのものごとを、こう断じておられるのです。

円教

円満完全な教え。

仏教のうちで最も完全な教え。

円融

それぞれのものが、その立場を保持しながら完全に一体となって互いに融けあい、さまたげがないこと

円満、自在であること。

円融真妙の正法

煩悩即菩提、生死即涅槃という諸法不二をさとる法門。

円融無碍

煩悩と菩提、生死と涅槃が完全に一つにとけあって、へだてのなくなったさとりの徳をいう。

閻魔

エンマは原語の梵語ヤマの音写で、インドの古い神です。
死者の生前の行為を審判し懲罰するという地獄の主たる神とされます。
仏教思想もこの古代インドの思想を受け継ぎますが、仏教の経典によると地蔵菩薩の化(変)身とも説きます。

厭離真実

聖道門の真実をいい、まず、この迷いの世界を厭い離れようとする心を起こして次にさとりを願うこと

往生治定（おうじょうじじょう）
浄土に往き生まれることが決まったこと。

応身（おうじん）
救う対象に相応したすがた（姿　相）で現れる仏身のこと。

往相回向（おうそうえこう）
人間が浄土の世界へ往く。

往相回向の心行（おうそうえこうのしんぎょう）
仏より回向された信心と称名のこと。

往益（おうやく）
浄土に往き生まれるという利益。
往生という利益。

憶想間断

阿弥陀仏をおもう心がとぎれること。

◇

果

生死の苦界。

カースト

釈尊存命時のインドでは、人間は四つの階級（カーストという）に分れていました。いちばん上はバラモンといって学問や宗教や道徳をつかさどる階級、第二は、セッテイリといって国王や武士の階級、第三は、ビシャといって、農・工・商人の階級、第四は、スダラといって、不可触民の階級です。

戒

戒というのは殺生をしてはいけない、盗みをしてはいけないというような戒めです。

戒行慧解（かいぎょうえげ）
戒律を守って修行することと、智慧による仏法の了解。

改悔懺悔（がいけさんげ）
自力を悔い改めて他力にまかせること。

開悟（かいご）
さとりを開くこと。

戒師（かいし）
戒を授ける師僧。

戒律（かいりつ）
仏教者の生活の戒め。

餓鬼（がき）

貪り欲張る心がかぎりなく起こってくる状態です。

貪る心が強ければ、その欲しがるものがいくらたくさん得られても、まだ欲しい、まだ欲しいと、とどまるところがないのです。

お金や物質だけではありません。

名誉に対する貪欲もあれば、人の愛情に対する貪欲もあります。

こうして、どこまでも貪り欲して満足することを知らないのが「餓鬼」です。

覚体

阿弥陀如来は完全に真理を体得されたかたであることをいう。

我見

自己中心の我執、我欲。

果後の方便

さとりを得た仏が、衆生を導くてだてとして菩薩となって発願成道を再現すること。

阿弥陀如来は久遠の昔に成仏されたが仮に法蔵菩薩になり発願修行されたのは、衆生を救うためのお手

まわしであるということ。

果遂の願

阿弥陀仏の第二十願。
果遂は「はたしとげる」ということで、一つは化土往生を、二つには第十八願への転入をはたしとげさせること。

羯磨

受戒の儀式のときに、いままでの身と心の経歴を告白した文章を書いて読みあげるものです。

我波羅密

ものごとがどんなに変化しても動くことのない絶対の存在である仏を信ずること。

加備力

仏の慈悲により衆生に利益を与える力。

我慢

この「我慢」というのは、しんぼうという意味ではなく、我の慢心です。すなわち、おれがおれが――と、いつも人の上に立ちたい心です。

迦陵頻伽

梵語カラヴィンカの音写。

妙声・好声・美音・妙音鳥などと漢訳する。

殻の中にいる時からよく鳴きその声は極めて美しいという。

歓喜

「歓」は身をよろこばしむるなり。

「喜」はこころによろこばしむるなり。

観喜光

瞋恚（いかり）を除く光。

願行具足（がんぎょうぐそく）

浄土往生の因となる願と行業とが具わりとのうこと。

観世音菩薩（観音）（観自在菩薩）（大士観世音）（かんぜおんぼさつ（かんのん）（かんじざいぼさつ）（だいじかんぜおん）

世の人々の声を聞いてくださる菩薩。

悩める人々の音声を観て解脱を得させる。

感徳（かんとく）

修行の結果、身に感じとる功徳。

感応（かんのう）

通ずるというのは、同じような心になることです。

我々が仏を思い出せば自然に我々の心が仏の心になってくることをいうのです。

そうすれば、自然とお互いの心の中に暖かみが生じ、寛容の気持ちが生じてきます。

我をおしたてて角突きあう気持ちがとれて、和やかになってきます。ですから、争いごとや闘いのさ中にあっても、ゆったりした気持ちになり、お互いがそうなれば争いも自然に解決します。

観仏

1. 正の観仏
阿弥陀仏を観想すること。
2. 雑の観仏
諸仏を観想すること。

観法

心に仏・浄土等を観じ念ずる、瞑想の実践修行法。

喜

人の喜びを供に喜んでやる心。

機法一体

機は衆生の往生、法は仏の正覚を指し、仏の正覚成就のままが衆生の往生成就である道理をいう。

鬼子母神

鬼子母神は、インドではカリティと呼ばれた女神です。
鬼子母神は、インドの王舎城に出てきて幼児を食べました。
お釈迦さまが鬼子母神の子供を隠すと、あわてて探して歩く、居ないので嘆き悲しみました。
ここで初めて子供を食べられてしまった母親の気持ちがわかったのです。
結局、鬼子母神はお釈迦さまに従い、今までの自分の非を悔い以後安産と子供の保護に当たり、子供の養育を助けることを約束しました。
このように、子供に害を与えた鬼のような女が、子供を慈しむ母のような女神に変ったのです。

喜捨

自分というものを忘れて人のためばかりを考えてやる気持ちです。

疑網

疑うこころを網にたとえるなり。

逆化

相手をボロクソにやっつけて、目を覚まさせる方法。

究竟畢竟（出世畢竟）

因果をこえた究極的な真理そのものである仏性をいう。

虚

この言葉には「嘘」という意味もあり「そこにないと思える」ことです。

行住座臥

「あるく、とどまる、すわる、ふすなり」これを四威儀という。また、いつも、つねにという意にも用いる。

行処

自分の身の振舞についての根本的な心得です。

共生極楽成仏道（共に極楽に生まれて仏道を成ぜん）

一緒に極楽に生まれて、成仏しよう。

弥陀の本願によるが故に、極楽へは念仏に励めば迎えて頂ける。それを願って念仏に励み、毎日を送る努力を惜しまない。

行体（ぎょうたい）

衆生往生の因となる行そのもののこと。

経道滅尽（きょうどうめつじん）

末法が一万年つづいた後、自力成仏の道を説いた聖道門の経典がすべてこの世界から消え失せることをいう。

行不退（ぎょうふたい）

念仏の行をはげむことによって、その功徳により浄土往生が決定すると信ずること。

教菩薩法（きょうぼさつぼう）

釈尊は、「あらゆる衆生は平等に仏性をもっている」という偉大なお見透しにより（平等大慧をもって）人のために尽くす行いこそ仏の境界に達する道であるという教え。

橋慢（きょうまん）

自分はえらい、よく悟っている、行いにもまちがいはないというおごりたかぶった心。

苦（く）

人生は苦の世界であること。（人生一切苦）

口安楽行（くあんらくぎょう）

第一に、人のあやまちや、経典のアラ探しなどをして、人に語ってはならない。
第二に、他の教えを説く人を、見下すような言葉を吐いてはいけない。
第三に、他人のよしあし、長所・欠点などをあげて批判するようなことはいけない。
小乗の人であっても、その名をさしてあれこれと批判してはいけない。
第四に、あの人は好きだ、きらいだ、というようなことをいってはならない。
こうして、いつも寛容な、おだやかな気持ちを持っていれば、教えを聞く人にもその気持ちが移て、自然と心がおだやかになってくるから、教えがその人の心に、スッとはいっていくのである。

もし難しい質問をしてくる人があったら、小乗の教えによって答えず、ただ大乗の教えによって説いてあげ、最高の智慧を悟らせるように導かねばならない。――これが口安楽行です。

空

・「あらゆるものには差別があるように見えるけれども、その差別をこえたむこうにある平等の姿を見なければならぬということ」。
・根本にある平等の相。
・すべてのものの仏性の平等。
・こだわりのない智慧で真実を見るということです。

空即是色

・あらゆる「物質」も、「心」も「できごと」も、すべて「空」によってできているから、「空」が即ち「色」なのです。
・「空」というのは、「なんにも無い」というのではありません、「平等」という意味です。
・「色」というのは「現象」ということです。

倶会一処（くえいっしょ）

「供に仏の世界にまいりましょう」という意味。

久遠実成（くおんじつじょう）

久遠劫の過去世において実に正覚を成就し仏となっていること。

一般に釈尊について、そのさとりの内容つまり法が常住永遠であることに、もとづいていわれるが、これに準じて阿弥陀仏も久遠実成の古仏、久遠実成阿弥陀といわれる。

すなわち経典には十劫の昔に成仏されたとあるが、実は久遠の昔からすでに成仏せられていた古仏であるということ。

弘願真宗（ぐがんしんしゅう）

本願念仏を説き顕した真実の教え。

究竟願（くきょうがん）

どんな困難にもくじけることなく必ず成就する願。

恭敬の心

つつしみうやまう心。
すなわち他力の信心のこと。

倶共弾指

「倶共に弾指したもう」とあります。
これはインドの習慣によることで、日本人には奇異にかんじられるかもしれませんが、人さし指とおや指とで円をつくって、それをポンと弾くことを弾指というのです。
これにはどういう意味があるかといいますと、「承知しました」とか「たしかに約束します」といって請合うしるしです。

口決相承

口伝によって法門を受け継ぐこと。

九字名号

阿弥陀仏の別号を「南無不可思議光如来」という。

「南無阿弥陀仏」といえば六字名号になる。

愚者三人に智者一人

愚者でも三人あつまれば智者一人にあたるという意。

屈請

（僧侶などを）請い招くこと。

功徳

・「信仰によって心境が変り、心境が変ることによって人生が変る」ことを「功徳」というのです。

・功徳というものは、たんに心の上にだけ現れるのではなく、肉体の上にも、物質生活の上にも現れてくるものです。

人間の心も、肉体も、そしてそのまわりに集まってくる物質も、おなじ一種の「空（エネルギー）」からできているからには、心が変れば肉体も変り、まわりに集まってくる物質も変ってくるのは理の当然であって、なんの不思議もありません。

功徳蔵

あらゆる功徳をおさめ、たくわえられている仏の意。

供養

供養とは、仏に帰依し、感謝する心を表す行動。

仮

この世のあらゆるものごとがわれわれの五官に感じられたり、心に考えられるときは、すべて、異なった相をしているように見えます。
その表面に現れた差別の相。

罣礙

「罣」は自然界のさしさわりのこと。
「礙」はむしろ人間界のさしさわり、合せて、世の中のさまざまなさしさわり。

解説

説法。

懈怠（けだい）

自分の進むべき本当の道に一生懸命にならず、怠けたり、ほかのつまらぬことにうちこんだりすること

解脱（げだつ）

執着の業から離れ、輪廻のくるしみから開放されること。

解脱堅固時（げだつけんごのとき）

この堅固というのは、「たしかにまちがいない」という意味で、解脱堅固時というのは、人々が釈尊の教えを実行して、煩悩の苦しみから解脱することが確かにまちがいない時代ということです。

解脱相（げだつそう）

心がものごとの変化に左右されなくなった状態です。

それは、ものごとを平等に見ることができるために、甲が消えて乙が現れても、心が動じないのです。

解脱幢相の霊服

袈裟の異名。

袈裟は、解脱の世界に至る標識であるという意味からいう。

幢相とは仏塔に揚げる幢に似ているところからいったもの。

決跏趺坐

足を組んですわる事（両のくびすをももの上に置座法）。

禅定を修める時の姿勢で、足を組んで座る座法の一種。

結集

釈尊が入滅されてから四ケ月目に、五百人の高弟たちが王舎城に集まって、自分たちの聞いた釈尊の教えを確かめあい、これこそ正しい釈尊のお言葉であるということがはっきりしてから、あらためてそれをしっかり記憶する努力をしました。

こういう会議を結集といいます。

血脈相承

師資相承。
師から代々正しく伝えて来たことを、身体の血脈が相連なって絶えないことに喩える。

慳

自分のもっている物を惜しむ心。

兼行六度

布施・持戒・忍辱・精進・一心（禅定）・智慧という六波羅密をできるかぎり身に行っていくならば、その徳は最もすぐれたものであって、虚空が東西南北・四維（南東・南西・北東・北西）・上下と無限に広がっているように、その功徳も無限であって、まっすぐに最高の智慧に達することができるでしょう、これが「兼行六度」の段階です。

眼根の罪

「わたくしはいままで、迷いのゆえにものごとの見かたを誤り、ものごとを見るたびに重い罪を重ねてまいりましたので、その罪が心を蔽い、心を汚し、諸法の実相を見ることができません。願わくは仏さまの大慈をもって、このようなわたくしをあわれみお救いくださいませ。

また普賢菩薩は教えの船に乗って一切の人びとを悟りの彼岸に渡らせてくださるお方です。どうぞ、わたくしが過去のあやまちを懺悔しますのに、お力をお添えくださいませ」こう三度唱え、全身全霊を投出して大乗の教えを正しく思いかえし、そして、けっして忘れないようにする――これが「眼根の罪」を懺悔する法であるというのです。

現生護念増上縁

この世にてまことの信ある人をまもりたまふと申すみことなり、「増上縁」はすぐれたる強縁となり。

現世利益

現世（現実社会）（この世）での御利益。

賢善精進

かしこく、善く、つとめはげむこと。

正しい行いの義。

親鸞聖人は「賢善精進の相」を「賢者や善人らしくつとめ励むすがた」とされ凡夫の内心は虚仮であるにもかかわらず外面に賢善精進の相をかざることをいましめられている。

還相回向（げんそうえこう）

浄土（じょうど）から人間（にんげん）の世界（せかい）へ還（かえ）る。

※還相回向（げんそうえこう）と往相回向（おうそうえこう）の二種類（しゅるい）によって浄土（じょうど）へ往（い）く往相回向（おうそうえこう）が現実逃避（げんじつとうひ）でなく、またこの世界（せかい）に還（かえ）る還相回向（げんそうえこう）が現実妥協（げんじつだきょう）でないことを明（あき）らかにしました、すなわち、二種（しゅ）の回向（えこう）によって、南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）の教（おし）えが自己満足（じこまんぞく）の救（すく）いでなく、いかなる状況（じょうきょう）の中（なか）にあっても生（い）き生（い）きと生（い）きていける本当（ほんとう）の人間（にんげん）になる教（おし）えであると示（しめ）しました。

それで『正像末和讃（しょうぞうまつわさん）』に、「もしも往相（おうそう）・還相（げんそう）の二種（しゅ）の回向（えこう）にあう機会（きかい）にめぐまれない境遇（きょうぐう）に生（う）まれたならば、生死流転（しょうじるてん）の果（は）てしない苦海（くかい）に沈（しず）んでいるなげきを、どうすることができたであろうか」と如来（にょらい）の回向（えこう）によってのみ、この苦海（くかい）を生（い）き尽（つ）くすことができると言（い）いました。

虚仮（こけ）

「そこにはないと思（おも）える」ことです。

五陰魔（ごいんま）

人間存在（にんげんそんざい）を構成（こうせい）している色（しき）（身体（しんたい））、受（じゅ）（感受作用（かんじゅさよう））、想（そう）（表象作用（ひょうしょうさよう））、行（ぎょう）（意志等（いしとう）の心作用（しんさよう））、識（しき）（認識作用（にんしきさよう））

の五つは仏道修行のさまたげとなるから五陰魔という。

業

「業」というのは、簡単にいえば、「行為」ということです。
我々のなすすべての行いが「業」なのです。
行為があれば、必ずその結果というものがあります。
私たちの、現在の瞬間におけるありかたというものは、すべて過去において自分がやってきたこと(業)の結果です。

広為他説

いよいよ進んで広く仏の教えを聞き、それを心に植えつけて忘れず、経典を書写するというような努力を実行するのです。
しかも自分だけでなく、人びとにもそれをすすめ実行させるのです。
すなわち、広く他の為に説く「広為他説」の段階です。

業因

生死の苦果をまねく因となる行為。

業縁（ごうえん）

業の因縁のことで、善悪の行為が苦楽の果を招く因縁となること。

業果法然（ごうかほうねん）

如来のなす行為とその行為の結果は、すべてありのままなる自然の道理にかなっていること。

光顔巍巍（こうげんぎぎ）

顔がおごそかに輝いていること。

香光荘厳（こうこうそうごん）

「念仏は智慧なり」。

念仏者は、阿弥陀如来よりたまわった智慧の香りと光によって、その人生が美しく荘厳されていくということ。

高貢のこころ（こうこ）
おごるこころなり。

行樹（ごうじゅ）
並木（なみき）

業障（ごうしょう）
往生（おうじょう）をさまたげる悪業（あくごう）。

広大異門（こうだいいもん）
広大無辺（こうだいむへん）な仏法（ぶっぽう）の徳（とく）を実現（じつげん）し、他（た）に比類（ひるい）なき特異（とくい）な法門（ほうもん）を成就（じょうじゅ）した安楽浄土（あんらくじょうど）のこと。

広大勝解者（こうだいしょうげしゃ）
広大（こうだい）な勝（すぐ）れた法（ほう）をよく領解（りょうげ）した智慧（ちえ）の人（ひと）の意（い）で、他力信心（たりきしんじん）の人（ひと）をいう。

広大智（こうだいち）

広く一切を知る智慧。

光明・名号・因縁を示す

阿弥陀仏が摂取の光明を縁とし、名号を因として、一切衆生をすくわれること。

光明智相

光明の本質は智慧であり、智慧の姿は光明であることを言ったもの。
智慧を本質とする光明が十方を照して衆生の迷いを除くこと。

五蘊

人間や人間をとりまく世界を構成している五つの力、作用のことです。
「蘊」はあつまりという意味です。

1. 色蘊――目に見えるものの世界のことです。
赤とか白の色を「顕色」、丸とか四角の形を「形色」両方合せたものが「色蘊」の世界です。

2. 受蘊――私たちがものを見た時に、「ああ、きれいだな」と受け止める働きがあります。

これを「受」という作用。

3. 想蘊――受け止めるとわたしたちは、それを頭の中に伝達します。その伝達することを「ものを想う作用」というので想蘊といいます。

4. 行蘊――「実行する力」

5. 識蘊――自分は今ここうこうしているなという認識作用が起きますから、これを「識蘊」というのです。

五蘊皆空

人間が生きているうちは五蘊の働きがあるが、死ねば消えてなくなってしまう、形あるものは必ず滅するという思想。

五戒

不殺生――生きものを殺さないこと。
不偸盗――盗まないこと。
不邪婬――邪婬を行わないこと。
不妄語――嘘を言わないこと。

不飲酒――――――酒を飲まないこと。

虚空蔵菩薩

虚空蔵とは大空のように、広大無辺の福徳・知恵を蔵するという意味です。

「大集経虚空蔵品」や「虚空蔵菩薩経」には、密教の教主である大日如来の働きのうち、虚空と蔵の特性をもつ菩薩で何ものにも打ち破られない力と、人びとに利益や安楽を与える菩薩と説かれています。

インドでは、虚空の母胎、蔵という意味を「アーカシャガルバ」といったので、それを訳して虚空蔵としたのです。

密教の仏さまで、金剛宝とか金剛蔵ともいいます。

「大日経疏」には「虚空は破壊すべからず、一切のものはこれに勝つことができない。蔵とは大宝で自在にこれをとり、貧乏を受けざらしむ」とあります。

だから、福と智の二徳を司る菩薩で胎蔵界曼荼羅図では虚空蔵院として描かれています。

極楽は常住の国

極楽浄土は永遠に変らない真実の世界ということ。

虚仮

むなしくかざるなり。

五劫思惟

阿弥陀仏が因位の法蔵菩薩のとき、世自在王仏のみもとで一切の衆生を平等に救うために、五劫という長い時間をかけて思惟をめぐらせ、往生の行法を選択されたことをいう。

己事

たとえば、失恋や事業の失敗や家庭の不和などにうちひしがれたり、いらだったりして、心が真理のレールを踏み外し、生命力が調和をうしなっている状態にあるとしましょう。

そういうときに、仏の教えによってほんとうの心の持ちかたを悟ることができれば、心も生命力も調和を得て、正しく、生き生きと動き出してくるのです。

これが「順」のあらわれです。

すなわち、救いがそのまま救いの形として現れるのです。

これを「己事」というのです。

五種法師（ごしゅほっし）

受持（じゅじ）・読（どく）・誦（じゅ）・解説（げせつ）・書写（しょしゃ）

五焼（ごしょう）

五悪（ごあく）をなすことにより、来世（らいせ）において受（う）ける果報（かほう）。

来世（らいせ）の益（えき）たる渡世（とせい）・長寿（ちょうじゅ）・泥洹（でいたん）にたいする語（ご）。

五常（ごじょう）

仁（じん）、義（ぎ）、礼（れい）、智（ち）、信（しん）。

五正行（ごしょうぎょう）

読誦（どくじゅ）・観察（かんさつ）・礼拝（れいはい）・称名（しょうみょう）・讃嘆供養（さんだんくよう）

五障三従（ごしょうさんしょう）

女性（じょせい）に加（くわ）えられた五種（ごしゅ）のさわりと三種（さんしゅ）の忍従（にんじゅう）。

女性（じょせい）は梵天王（ぼんてんおう）、帝釈天（たいしゃくてん）、魔王（まおう）、転輪聖王（てんりんせいおう）、仏身（ぶっしん）になれないことを五障（ごしょう）といい、三従（さんしょう）とは幼（おさな）いときは父（ちち）（親（おや））

に従い、嫁しては夫に従い老いては息子に従うもので、女性は従属的地位にあり、指導者にはなれないと規定したことをいう。

五濁

1. 劫濁――時代が長くたったために起こってくる悪です。
例えば、世の中も同じ状態が長くつづくと動脈硬化を起こしていろいろな弊害が起こるようなものです。

2. 煩悩濁――煩悩（迷い）のために人間みんながつまらない行いをするようになること。
犯罪の横行はこのゆえです。

3. 衆生濁――人びとの表面の性質がちがうところから起こってくる争いです。
もともとはひとつの生命で貫かれているということを知らず、表面の相違にとらわれて、それぞれが自我を主張するために、対立が起こり家庭の中や社会が不和になる状態です。

4. 見濁――ものの見方がそれぞれちがうために起こる世の中の乱れです。
みんな自己本位の狭いもののみかたをするためにくいちがいが起こってくるのであって、みんなが仏の教えのような正しいもののみかたをするようになれば自然と

争いのない平和な世界ができるはずです。

5. 命濁――人間の命が短くなるために人びとの考えることなすことが、目前の利益や、すぐ効果の現れるようなことばかりを追って、コセコセしたものになり、そのために世の中にみにくいゴタゴタが絶えずゆったりしたところのない状態です。これも、みんなが人間の永遠の生命ということに目を覚ましさえすれば、必ず救われることなのです。

己身

「己れの身」すなわち仏の本体ということで本仏を指しています。

己身の弥陀唯心の浄土

阿弥陀仏も極楽浄土も共に、自己の心身のうちに本具する性徳であるという意で華厳・天台・禅宗等の聖士門の説。

五千起去

釈尊の説法時において、五千人もの弟子が一時に法座から立ち去っていっても、釈尊はそれをお止めにな

らなかったのです。

五祖
法然上人は、曇鸞大師、導綽禅師、善導大師、懐感禅師、少康法師の五師を五祖と呼ばれた。

五痛
五悪を犯すことにより、現世において受ける華報。
現世の益たる福徳に対する語。

業垢
悪業煩悩なり。

五天
・世天（世間の人王）
・生天（天界の諸天）
・浄天（声聞・縁覚）

・義天（菩薩）
・第一義天（仏）

五徳

五善を修めて得た五つの功徳。

言葉の力

仏の教えでは、言葉と言うものを非常に尊重しております。

仏教で、人を導く要諦として「和顔愛語」すなわち和やかな顔と愛情をこめた言葉をあげているのも、その一つの表れです。

妙音菩薩というお方になぜ「妙音」という名前がつけられたかということを深く考えてみると、この「美しい音」というのはどうしても「真理のことば」という意味でなければならないことがわかってきます。

五念門

礼拝、讃嘆、作願、観察、回向

五無間（五逆）

父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、仏身を傷つける、仏弟子の和合を破る、以上の五大悪逆で、無間地獄へ落ちるとされている。

五欲

色・声・香・味・触

財欲・色欲・飲食欲・名欲・睡眠欲

去来対

釈迦は去けと発遣され、阿弥陀如来は「来れ」と招喚されることをいう。

欣求真実

浄土門の真実をいい、まず、浄土の願うべきことを知らされることによって、穢土の厭うべきことに気づかしめられるからである。

権化

仏・菩薩が衆生を救おうとして仮に人の姿を現したもの。

権化の教

聖道門と浄土門内の方便教である要門、真門のことである。

金剛心

金剛は梵語ヴァジュラの漢訳で、何ものにも破壊されない金剛石のこと。

金光明

「金光明経」のこと。

仏の寿命の無量、善神の護持、正法による統治などが、説かれる。

とくに鎮護国家、除災招福の経典として用いられた。

言語道断

言葉を超えていること。

真理は言葉や文字では表現できないほど奥深いことをいう。

言護念増上縁者（ごんごねんぞうじょうえんしゃ）

まことの心をえたる人を、この世にて、つねにまもりたまふと申すことばなり。

権実（ごんじつ）

権とは、一時的なかりそめのてだてとして設けたもの。

真実の教え（実教）に入らしめるために一時的に方便として仮に説かれた教え（権教）、実とは、永久不変の究極的な真実のもの。

権者（ごんじゃ）

仏・菩薩が衆生を救うために、この世にあらわれた仮の姿のこと。

根性（こんじょう）

教えをうけるものの性質、資質。

欣慕浄土の善根（ごんぼじょうどのぜんこん）

浄土を願い慕わせるための善根。

◇

罪障
往生のさまたげとなる罪。

済生利物
生あるものを救い利すること。

財施
金銭や物質を布施する事。

斉同不退
浄土に往生すれば、みな一味平等の悟りをひらいて、再び迷界に退転しないことをいう。

西方

東は太陽の出る方角で、ものごとの始まる所を示し、反対に西は太陽の沈む方角でものごとの納る所を示しているのです。

死んでから西方極楽浄土へ行くと言うのも、その思想によるものです。

三悪道（苦海）

地獄・餓鬼・畜生

三縁

阿弥陀仏が念仏の衆生を摂取する三種の深いかかわりのこと。

1. 親縁――衆生が口で仏名を称え、身で仏を礼拝し、意で仏を念ずるとき、これらを仏は聞き、見、知って衆生と仏とは互いに憶念し合うという。
   密接不離の関係にあること。
2. 近縁――衆生が仏を見たいと願えば目前にあらわれるという関係にあること。
3. 増上縁――衆生が名号を称えれば多劫の罪を除き、命の終わるときには仏は聖衆とともに来迎し

て、罪業の繋縛に障碍されず往生させること。

僧伽

僧というのは僧伽の略であり、サンガというのは、梵語で「密接な結合」という意味です、釈尊は、そのお弟子たち、すなわち同じ仏の道を歩む仲間の集団に、この僧伽という名前をつけられたのでした。

三界

「三界」というのは、いろいろな解釈のしかたがありますが、普通の解釈に従えば、人間の住んでいる世界（目に見える世界と目に見えぬ世界をひっくるめて）を三つに分け、欲界・色界・無色界とした考えかたです。

欲界――五欲に満ちたわれわれの日常生活の世界です。

色界――心の中で考えられる世界ですが、しかしそれは、ある形をもって考えられる世界です

普通われわれが心で考えるいろいろなものごとです。

無色界――形もなにもない、純粋に心の中だけの世界であって、座禅その他の行によって精神を統一すれば、そういう世界に達せられるとされたものです。

三観仏乗の理（さんかんぶつじょうのり）

空・仮・中の三種の観法によって、生きとし生けるすべてのものがさとりをひらくとする教え。

三祇百大劫（さんぎひゃくだいこう）

菩薩が成仏するまでに経過する長い時間。

三阿僧祇劫にわたって六度の行を修め、さらに百劫の間、相好を感得するための福業を修めて成仏するという。

阿僧祇は無数漢訳する。

三経（さんぎょう）

大経・観経・小経

三経一論（さんぎょういちろん）

「大経」・「観経」・「小経」の浄土三部経と天親菩薩の「浄土論」のこと。

懺悔（さんげ）

二段階に分れ、第一段階は、普通一般にいう懺悔で、自分の過去における心や行いの過ちを告白することです。

第二段階は、自分の仏性を磨きあげる行であるといっていいでしょう。

三解脱門

解脱をうる三種の方法。

1. 空解脱門――一切の存在は空であると観ずる。
2. 無相解脱門――一切が空であるから、差別の相はないと観ずる。
3. 無願解脱門――願求すべき何ものもないと観ずる。

三業

身・口・意のはたらき。

身に行う身業、口に言う口業（語業ともいう）、心に思う意業（思業ともいう）。

三種の菩提

声聞・縁覚・菩薩のさとり。

三障（さんしょう）

悟りの道をさまたげ善心を害する三種。

1. 煩悩障――貪欲・瞋恚・愚痴等の惑
2. 業　障――五逆・十悪等の身・口・意の三業に悪業のみをなす障り。
3. 報　障――悪業の果報として受ける、地獄・餓鬼・畜生等の苦しみの報い。あわせて惑・業・苦という。

三心（さんしん）

至心・信楽・欲生

三塗の巣守（さんずのすもり）

三悪道の古巣に取り残され、迷界にとどまるもの。

三世間（さんせけん）

五陰世間――われわれ個人の心と心がおたがいに影響をあたえあっている関係の世間、いわばせまい

意味の生活環境です。

衆生世間――衆生がいっしょにあっまって生活している社会（普通にいう社会や国家と考えてよい）。

国土世間――その社会や国家がたくさんあって、それらが仲良くしたり、争ったりしている。

世間（普通に言う「世界」とかんがえてよい）。

三千の法門

一切の法門という意。

三尊（中尊と両脇侍のこと）

釈迦三尊は文殊・普賢の二菩薩

薬師三尊は日光・月光の二菩薩

阿弥陀三尊は観音・勢至の二菩薩

三朝浄土の宗師

インド・中国・日本にあらわれて浄土真宗を伝えられた七高僧。

三毒（三障）

貪――むさぼりの心。
瞋――怒りの心。
痴――愚かな心、真理に対する無知。

三忍

信・喜・悟

・信忍――すなわちこれ信心成就のすがたなり。
・喜忍――信心歓喜の得益をあらはすこころなり。
・悟忍――仏智をさとるこころなり。

三念処

仏の衆生に対する態度を次の三つに分けて示されたものです。

・初念処――衆生が仏をたたえても、たたえられたことを喜びとされないで、たたえた衆生の心を喜んでくだされるのです、これを初念処といいます。
・二念処――仏は、仏をののしったり、のろったりする人があっても、ご自身のためには、すこし

も悲しんだり怒ったりなさらない。

そんなことをする人の心を、かわいそうだと深くあわれみ、悲しまれます。

これを二念処といいます。

・三念処――衆生の中には、仏の教えに帰依した人としない人とがありますが、仏はその二種類の人に対して分けへだてをなさらない、平等に慈悲をおかけになってくださる。なぜならば、すべて平等に仏性をもっているからです。こういう一視同仁のお心をもって衆生をごらんになっておられることを三念処といいます。

三輩の文

第十九願成就の文。

三福

「観経」に説かれた散善の行三種に分類したもの、

1．世福（世俗の善）――父母に孝行を尽くし師長（師や先輩）によく仕え、慈悲心をもち、善行を修めること。

2. 戒福（小乗の善）――仏・法・僧の三宝に帰依しすべての戒を守って威儀を正すこと。
3. 行福（大乗の善）――菩提心をおこし、大乗経典を読誦して浄土往生を願うこと。

三不三信

三不心と三信のこと。

・三不心とは信心が淳からず、一ならず、相続せずをいう。
・三信とは淳心・一心・相続心という。

三仏菩提尊

法身・報身・化身

三仏菩提の願船

法・報・応の三身の徳を全うして、衆生を救う本願を船に喩える。

三宝

・仏・法・僧

三法印（さんぽういん）

諸行無常（しょぎょうむじょう）

諸法無我（しょほうむが）

涅槃寂静（ねはんじゃくじょう）

三法忍（さんぽうにん）

1. 音響忍（おんこうにん）
2. 柔順忍（にゅうじゅんにん）
3. 無生法忍（むしょうほうにん）

三昧（さんまい）

ひとつのよい考え（かんが）に精神（せいしん）が統一（とういつ）してわき道（みち）へそれることがないこと。

三昧発得の人師（さんまいほっとくのにんし）

善導大師（ぜんどうだいし）のこと。

三密行業（さんみつぎょうごう）
身口意の三密加持の実践法。

三明（さんみょう）
宿命通・天眼通・漏尽通

散乱増（さんらんぞう）
心をかきみだす煩悩が強いこと。

事（じ）
「信仰」と「実行」でなくてはいけないという境地。

止悪行善（しあくぎょうぜん）
悪を止め善を行う。

四威儀
四種の威儀の意。
行（歩くこと）・住（とどまること）・坐（すわること）・臥（ふせること）の四つをいう。

持戒
仏のいろいろな戒めをしっかり守らなければならぬという心。

持戒持律
戒律を守って犯さないこと。

止観
止は梵語シャマタの漢訳、観は梵語ヴイパシュヤナーの漢訳、もろもろのおもいを止めて心をひとつの対象に集中し（止）、それによってただしい智慧をおこして対象を観る（観）ことをいう。

此岸
こちらの煩悩の岸。

思議

心でおしはかること。
言葉でも表現すること。

色即是空

あらゆる「物質」も、人間の「心」も、世の中の「できごと」も、すべてその大本は同じであるという意味です。

あらゆる「物質」も、「心」も、「できごと」も人間の目でみればちがったように見えるけれども、その実相はすべて「平等」であるというのです。

ギリギリのところまで分解していってみると、すべてがエネルギー（力）という一種のものになってしまうから、「平等」なのです。

自行

人間にとっては、自分自身でものごとをやるということがいちばん大切なことです。

自行化他

仏道修行において、自分がよくなることは、ひいては周囲の人々をよくすることです、「自行」即「化他」。自分のためになすことを自行、他人を化益することを化他という。

四教円融の義

釈尊一代の教説を蔵・通・別・円の四教に分け、「法華経」には、その一切がまどかにそなわつているとする天台宗の教義。

示教利喜

これは、教えを説く順序をいってあるので、第一に大体の意味を説き「示」し、その教えにはいってゆきたいという気持ちが相手の心に動いてきたと見たら、こんどは深い意味を「教」えます。それも理解できたように思えたら、教えを実行して「利」益を得るように導き、そしてその教えを持ちつづけることが人生の「喜」びとなるように仕向けてやる。

これを示教利喜といいます。

教えに導いていく合理的な順序。

仁義礼智信

儒教における人のおこなうべきことを五つの徳として表したもの。

四弘誓願

1. 衆生無辺誓願度――衆生の数は無辺であろうとも、かならず一切を救おうと誓願する。（安立行）
2. 煩悩無数誓願断――煩悩の数は無数であろうとも、かならずすべてを断ち切ろうと誓願する。（浄行）
3. 法門無尽誓願学――仏の教えは無尽であろうとも、かならず学びつくそうと誓願する。（無辺行）
4. 仏道無上誓願成――仏の道は無上であろうとも、かならず到達しようと誓願する。（上行）

四苦八苦

人間に均しく与えられた四つの苦しみと、社会生活をするうちに生まれてくる四つの苦しみを合せて「四苦八苦」と呼んでいます。

人間に均しく与えられた四つの苦しみとは「生・老・病・死」であり、人間として生まれた以上、好むと好まざるにかかわらず受ける苦しみです。

そして、人間関係から生まれる四苦とは、次のことをいうのです。

愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦

失恋の心の痛手に苦しむ人なら愛別離苦。

仲の悪い姑と嫁が一緒に暮らさなければならない怨憎会苦

自動車や邸宅が欲しいがどうにもならないという求不得苦

肉体や精神が健全であればあるほど悩みも深くなる五陰盛苦。

自見の覚語

自分ひとりの見解。

異本には「自見の覚悟」とあり、口伝の真心に対し、自己の見解をもって信心を定めることをいう。

地獄

心が怒りで占領されている状態です。

四事

衣服・飲食・臥具・湯薬

四種の門
礼拝・讃嘆・作願・観察

自障自蔽
みずからさとりの道をさえぎり、みずから正しい道を蔽いかくすこと。

自障障他
みずからの行動をさまたげ、また他人をもさまたげること。

資生の業を説
農業・工業・商業というような産業のことについて論じたり、指導したりすることです。

四摂法（四摂事ともいう）
1. 布施――自分の力を分け与えること。
2. 愛語――やさしい言葉。
3. 利他行――人のために尽くすこと（利行ともいう）

4．同時――差別をしないこと。

自性唯心

万有はその本性についていえば、ただ心の変現にほかならないもので、自己の心以外に何ものもないとする考え。

この立場より自己の心性を指して直ちに弥陀といい、この心を浄土であると主張する。

時処諸縁

時間と場所とさまざまな条件。

四信五品

「四信」とは、「在世の四信」といい、釈尊ご在世中における信仰のありかたを四つの段階に分けて考えたもので、1．一念信解　2．略解言趣　3．広為他説　4．深信観成

「五品」というのは、「滅後の五品」といい末世における信仰のありかたを五つの段階に分けて考えたものであって、1．初随喜　2．読誦　3．説法　4．兼行六度　5．正行六度

治世の語言

政治、経済、法律というようなことがらについて説くことをいいます。

地蔵菩薩

地蔵の原語は、大地の意味のクシティと胎を意味するガルバとの合字のクシティガルバです、地蔵菩薩の由来を説く「地蔵菩薩本願経」にむかし、二人の王がいた。

一人の王は、一日も早くさとりを開いて、人びとを助けたいと願いを発す。

一人の王は、みんなを度ってから、自分は仏になろうと発願する。

先の王は一切智成如来という仏になり、後の王は地蔵菩薩である。

また「地蔵十輪経」には、「釈尊の没後、第二の釈尊と仰がれる弥勒菩薩が、この世に現れる迄、五十六億七千万年という長い間、この世に仏は在しまさない。

この無仏の期間を、仏に代って世の中を度うのが地蔵菩薩である」と説かれています。

自損損他

自分をそこない、他人をそこなうこと。

二諦

1. 真諦――絶対的な宗教的真理
2. 俗諦――世間で認められる相対的な真理

自他一体

人の苦しみを見れば、ひとりでに救いの手をさしのべずにはいられなくなるのが、ほんとうの菩薩心です。

自他法界同利益（自他法界は利益を同じくし）

私だけでなく美味しいものは皆で分けあって食べよう。
共にわかち合い、共に幸せになれるように努力することを惜しまない。

七観音

聖観音・十一面観音・千手観音・不空羂索観音・馬頭観音・如意輪観音・准胝観音

七高僧

1. 龍樹大士
2. 天親菩薩
3. 曇鸞大師
4. 道綽禅師
5. 善導大師
6. 源信和尚
7. 源空上人（法然上人）

七支（しちし）

「不殺生（ふせっしょう）・不偸盗（ふちゅうとう）・不邪淫（ふじゃいん）・不妄語（ふもうご）・不悪口（ふあっく）・不綺語（ふきご）・不両舌（ふりょうぜつ）の七戒（しちかい）をかたどるものとされています。

質直（しちじき）

心（こころ）に飾（かざ）り気（け）がなくまっすぐなこと。

七難（しちなん）

火難（かなん）・水難（すいなん）・風難（ふうなん）・剣難（けんなん）・鬼難（きなん）・獄難（ごくなん）・盗難（とうなん）

七福神（しちふくじん）

福徳（ふくとく）をもたらす七福神（しちふくじん）は成立（せいりつ）が謎（なぞ）のベールにつつまれた神（かみ）さま仏（ほとけ）さまの多国籍軍（たこくせきぐん）です、大黒（だいこく）さまはインドの大黒天（だいこくてん）と日本神話（にほんしんわ）の大国主命（おおくにぬしのみこと）が合体（がったい）したものですし、恵美須（えびす）さんもやはり、日本（にほん）の少彦主命（すくなひこのみこと）（あるいは蛭子（ひるこ）の読（よ）み違（ちが）い）、弁才天（べんざいてん）はインドの仏教出身（ぶっきょうしゅっしん）、毘沙門天（びしゃもんてん）は四天王（してんおう）の一人（ひとり）ですが、もともとの由来（ゆらい）は、インドヒンズー教（きょう）の財宝神（さいほうじん）、布袋（ほてい）は中国経山寺（ちゅうごくきょうざんじ）の住職（じゅうしょく）、福禄寿（ふくろくじゅ）は一説（いっせつ）に琉球人（りゅうきゅうじん）による作（さく）で、おめでたい言葉（ことば）の三文字（さんもじ）集合（しゅうごう）によって出現（しゅつげん）したとされています。

ここまでで、六神なのですが、数が吉数でないということで、もう一人、寿老人を加えて七人にしてしまったのです。

どうして七人なのかというと「仁王護国般若経」に「七難即滅、七福即生」とあり、あるいは、このへんからうまれてきたのかもしれません。

七宝

金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・硨磲・瑪瑙

七菩提分

七覚・七覚分・七覚支・ともいう。

さとりを得るために役立つ七種の行法。

1. 念覚支――心にあきらかに憶いとどめてわすれないこと。
2. 択法覚支――智慧によって、法の真か偽かを選択すること。
3. 精進覚支――一心に努力すること。
4. 喜覚支――法を楽しみ喜ぶこと。
5. 軽安覚支――心身が軽やかでやすらかなこと。

6. 定覚支――心を集中して乱さないこと。
7. 捨覚支――心の興奮や沈滞がなく平静なこと。

実

「実際にそこにあると見える」ことです。

十界互具

だれの心の中にも凡夫の六界と聖者の四界の十界が具わっている。

「人間」の心の中にもこの十界が具わっているし「天上」の人の心の中にもこの十界が具わっている。

つまり、十界の人の心の中に全部十界が具わっているというので、これを「十界互具」といいます。

悉現前

さまざまのめでたきことでも、めのまえにあらはれたまへとねがへとなり。

実証

わたしは仏法を信じ、行うようになってから、このとおり変ったんですよ――と、生きた事実を見せ

ること。

実相（じっそう）

ほんとうの姿（すがた）。

人間（にんげん）の命（いのち）をはじめとして世（よ）の中（なか）のすべてのものごとは、まことに千差万別（せんさばんべつ）で、生（しょう）じたり、消（き）えたり、移（うつ）り変（か）わったり、さまざまな状態（じょうたい）を現（あらわ）しています。

われわれの心（こころ）は、その差別（さべつ）や変化（へんか）によってまどわされ、苦（くる）しんだり悩（なや）んだりするのですが、もし我々（われわれ）がものごとの表面（ひょうめん）に見（み）える差別（さべつ）や変化に目（め）もくれず、その奥底（おくそこ）にある「差別を超越（ちょうえつ）した真（しん）の姿（すがた）」「永遠（えいえん）に変（かわ）ることのない真の姿」をみとおすこと。

実諦（じったい）

真如実相（しんにょじっそう）のこと。

十方（じっぽう）

東西南北（とうざいなんぼく）と四維（しい）（よすみ）および上下（じょうげ）をいう。

十法界

地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界。

四諦（四聖諦）

苦諦――苦しみのありのままをみきわめる、

集諦――苦が何によって生じたのか、その原因をつかみ

滅諦――とらわれの心が原因とわかれば、その執着心をなくすよう努力する

道諦――そうすれば実践の道が明らかになる涅槃寂静の境地に至るためには、八聖道（八正道）を実践せねばならないという真理。

四顛倒

四つの道理に背く見解、すなわち、凡夫が無常・苦・無我・不浄のこの世を常・楽・我・浄と思い誤ること。

これを有為の四顛倒という。

また、声聞・縁覚のさとりの世界が常・楽・我・浄であることを知らないで無常・苦・無我・不浄である

と思い誤ること。
これを無為の四顛倒という。

四天王

持国天・増上天・広目天・多聞天のこと。
それぞれ須弥山の東南西北にあって仏教と仏教徒を守る。

自燈明・法燈明

釈尊が入滅を前にして阿難にいい残された教えです。
「阿難」よ。
あなた方は、ただ自らを燈明とし、自らをよりどころとするのです。
他人をよりどころとしてはいけません。
また、法を燈明とし、法をよりどころとするのです。
他をよりどころとしてはいけません。
※ここでの「法」は「真理」とか「宇宙の法則」という意味の「法」である。

至徳具足

名号にこめられたこの上もない尊い徳が行者の身にそなわること。

此土他土一異

仏の絶対的なさとりからすればこの世界とかの浄土の区別はなく一如の世界であるが、我々の相対的な認識からすれば異である。

次如弥勒

念仏のひとは弥勒のごとくほとけになるべしとなり。

自然

人為的なものに対して、人為をからず、おのずからそうなっていること。

親鸞聖人は、「おのづからしからしむ」と読み人間のはからいを超えた如来のはからいによる救いをあらわす語とされた、意味上三種に分類される。

1．業道自然――善悪の行為によって因果の法則どおりに結果を生ずること。

2. 願力自然――他力の意。
阿弥陀仏の本願力を信じ、救いをたのむ行者は、何のはからいをも用いないで本願力によっておのずから浄土に往生せしめられることをいう。

3. 無為自然――さとりの世界は有無の分別をはなれ分別による限定を超えた絶対無限の境地であることをいう。

自然清和

おのずから発する響きが清らかに調和していること。

自然の智慧

自然というのは「自ら生まれた」という意味で、これは心の中に生じてきた信仰をいうのです。ですから「自然の智慧」というのは、「信仰の智慧」にほかなりません。

地の精気

五穀をみのらせる元気。

慈悲

自分ひとりが智慧をそなえていても、または、自分ひとりが正しくても、世の中全体はよくならないことがわかります。それで、智慧のおくれた、したがって道をふみはずしている人びとを見ると、どうしてもそれを救ってあげなければならない気持ち。

四法

1. 自分は仏さまに生かされているのだということを、いつも心に思っていなさい。
2. いつも善い行いをすることに心がけなさい。
3. いつも正しい信仰者の仲間にはいっていなさい。
4. いつも人のためにつくすことを考えなさい。

邪偽の教

仏教以外の外道のことをいう。

釈迦如来

今から約二千五百年ほど前、インドのカピラヴァストウ（現在のネパール領タラーイ地方）に近いルンビ

ニー園で釈迦族の王子としてお生まれになった、歴史上実在の仏陀です。釈迦族出身の如来（仏陀）という意味でこう申上げるのですが、その他にも、釈迦牟尼仏・釈迦牟尼世尊・ゴータマ仏（生家の性）・釈尊など多くの尊称でよばれています。二十九才の時に出家され、六年間の修行生活の後三十五才で大菩提樹の下で悟りを開かれ、その後四十五年間の伝導生活を行われ、多くの人に、人間の持つ悩み特に生・老・病・死について説法をされました。ちなみに御誕生日は四月八日、悟りを開かれた日は、十二月八日、入滅された日は二月十五日（紀元前四世紀）。

寂静（じゃくじょう）
不変

寂静無為の楽（じゃくじょうむいのみやこ）
煩悩を滅し尽くした生滅変化のない絶対のさとりの世界。浄土のこと。

折伏（しゃくふく）
正しい道へ引き入れること。

迹仏（しゃくぶつ）
この世に実際にお生まれになり、修行の結果、仏の境地に達せられ、八十歳で入滅された釈迦牟尼世尊のことです。

寂滅平等身（じゃくめつびょうどうしん）
煩悩が完全に滅して、一如平等の真実をさとったもの。

寂滅無為の一理（じゃくめつむいのいちり）
煩悩が消滅したところにあらわれる生滅を超えた一如の理

迹門（しゃくもん）
「迹仏」の教えということです。

捨家棄欲（しゃけきよく）
家をすて世間の欲をすてて修行すること。

邪見（じゃけん）

まちがった考え。善悪の業報や三世因果などを否定すること。

邪定聚（じゃじょうじゅ）

わるいことに決定したものの集まり。

娑婆即寂光土（しゃばそくじゃっこうど）

心がほんとうに宗教的に清まっておれば、外の世界（物で成り立っている世界）がどうかわっても、精神は常に平和です。楽しいのです。

いつも美しい花を見、妙なる音楽を聞いているような状態です。

こういう法悦の境地を、以上のように、極楽ともいうべき世界の有様になぞらえていってあるわけです

奢摩他寂静三昧（しゃまたじゃくじょうさんまい）

よこしまな乱れ心を離れ、思いを止めて心の寂静になった状態。

邪慢

「邪慢」というのは、邪なことをしていながら、ちっともわるくないと思っている慢心です。無反省な心です。

沙弥

沙弥とは七歳以上二十歳未満の出家の男子のこと。

住

一切のものごと（法）を深く知らなければならない。
それが深く解れば、ひとりでに、これからさきどんなものごとが起こるか（生）もわかってくる。
また、このものごとはしばらく変らないでつづいていくだろうということ（住）

十悪（十悪業）

殺生、偸盗、邪淫、妄語（うそをつく）、綺語（口先でごまかす）、両舌（二枚舌で人の仲をさく）、悪口、貪欲、瞋恚、愚痴

修因感果

因位の修行を完成し、仏果をうること。

修因感果の道理

自身の修行を因として、それにふさわしい証果を得る。自業自得の道理。

十三仏

十三仏とは不動、釈迦、文殊、普賢、地蔵、弥勒、薬師、観音、勢至、阿弥陀、阿閦、大日、虚空蔵、です。

十三仏真言

不動明王――ノウマク　サンマンダ　パザラダン　カン。
釈迦如来――ノウマク　サンマンダ　ボダナン　バク。
文殊菩薩――オン　アラハシヤ　ノウ。

普賢菩薩――オン　サンマヤ　サトバン。
地蔵菩薩――オン　カカカ　ビサンマエイソワカ。
弥勒菩薩――オン　マイタレヤ　ソワカ。
薬師如来――オン　コロコロ　センダリマトウギ　ソワカ。
観音菩薩――オン　アロリキヤ　ソワカ。
勢至菩薩――オン　サン　ザン　ザンサクソワカ。
阿弥陀如来――オン　アミリタテイセイカラ　ウン。
阿閦如来――オン　アキシュビヤ　ウン。
大日如来――オン　バザラ　ダトバン。
虚空蔵菩薩――オン　バザラ　アラタンノウオン　クラク　ソワカ。

宗師

曇鸞大師、道綽禅師、善導大師、源信和尚、源空上人

執心牢固

本願をとりたもつ心（信心）が、ひとすじで強固であること。

十善

不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見

十大弟子

智慧第一の舎利弗（舎利子）、目健連、摩訶迦葉、阿那律、須菩提、富楼那、迦旃延、優波離、羅睺羅、阿難陀の十人の仏弟子

宗致

経典に説かれた法義の最も肝要なことがら。

十二因縁

小乗の教えの要点のひとつで、人間（凡夫）が生まれてから死ぬまでの過程と、それが祖先から自分へ、自分から子孫へと輪廻していく状態をつぶさにお説きになり、人生の苦悩はすべて根本の無明（煩悩）が根源であるから、この無明を断ち切ることによって苦悩がなくなり、三世にわたって幸せが得られることをお説きになった大切なおしえです。

十二の段階とは、1.「無明」2.「行」3.「識」4.「名色」5.「六入（六処または六根ともいう）」6.「触」7.「受」8.「愛」9.「取」10.「有」11.「生」12.「老死」

十二処

「六根」と「六境」をたしたもの。

十如是

諸々の事物は相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究境

1. 如是相、2. 如是性、3. 如是体、4. 如是力、5. 如是作、6. 如是因、7. 如是縁、8. 如是果、9. 如是報、10. 如是本末究意等

十二類生

生物の生まれ方の分類。

胎生・卵生・湿生・化生・の四生に、有色・無色・有想・無想・非有色・非無色・非有想・非無想の八生を加えたもの。

十八界

「十二処」に「六界」を加えたもの。

十力

仏が具えている十種の力。

1. 処非処智力――道理・非理を知る力。
2. 業異熟智力――業とその果報との因果関係を知る力。
3. 静慮解脱等持等至智力――禅定や三昧を知る力。
4. 根上下智力――衆生の能力や性質の優劣を知る力。
5. 種種勝解智力――衆生の意欲や望みをあきらかに知る力。
6. 種種界智力――衆生の本性を知る力。
7. 遍趣行智力――衆生の人、天等の諸世界に趣く行の因果を知る力。
8. 宿住随念智力――自他の過去世のこと。
9. 死生智力――衆生の未来の生死・善悪の世界を知る力。
10. 漏尽智力――煩悩を滅した涅槃の境地とそれに到達するための手段を知る力。

十六観想（じゅうろくかんそう）

1. 日想観（にちそうかん）、2. 水想観（すいそうかん）、3. 地想観（ちそうかん）、4. 宝樹観（ほうじゅかん）、5. 宝地観（ほうちかん）、6. 宝楼観（ほうろうかん）、7. 華座観（かざかん）、8. 像想観（ぞうそうかん）、9. 真身観（しんしんかん）、10. 観音観（かんのんかん）、11. 勢至観（せいしかん）、12. 普観（ふかん）、13. 雑想観（ざつそうかん）、14. 上輩観（じょうはいかん）、15. 中輩観（ちゅうはいかん）、16. 下輩観（げはいかん）

授記（じゅき）

仏（ほとけ）が「いつかはあなたも仏（ほとけ）になれる」という保証（ほしょう）をくださること。

宿縁（しゅくえん）

阿弥陀仏（あみだぶつ）が遠（とお）いはてしない昔（むかし）から、衆生（しゅじょう）を救済（きゅうさい）しようという誓願（せいがん）をたてられた縁（えん）のこと。

宿願力（しゅくがんりき）

阿弥陀仏（あみだぶつ）が法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）といわれた因位（いんに）のときに衆生救済（しゅじょうきゅうさい）のためにおこした本願（ほんがん）のちから。

宿業（しゅくごう）

過去世に造った善悪の業のこと。

これは過去世になした行為が原因となって、今生の在り方が規定されるという考えにもとづいている。何十万年も前のことさえもわれわれの心の奥底にはちゃんと残っているのですから、まして何十代前とか何代前というような近い祖先のなした行いや心のもちかたの影響は、なおさら強く残っているのです。仏教でいう「宿業」は、そのうえにもっともっと深遠なものを含んでいます、すなわち、自分自身の生命が無限の過去から生きかわり死にかわりしながらつくってきた「業」も、それに加わるわけです。

宿善

・過去世に積んだ善根。
・獲信のための善き因縁。
・如来の調育のはたらき。

宿福

当相は過去世で積んだ福徳善根。
その体は如来の光明のお育て。

宿命（しゅくみょう）
過去の世における生活のこと。

衆苦輪（しゅくりん）
輪廻のくるしみは車輪が回転し続けるように果てしなく続くことから、車輪に喩えたもの。

衆生の精気（しゅじょうのしょうけ）
生きとし生けるもののもつ生命力。

殊勝の法（しゅしょうのほう）
とくにすぐれた教え。
阿弥陀如来の本願をいう。

衆生無辺誓願度（衆生は無辺なれども誓って度せんことを願う）（しゅじょうむへんせいがんど）
苦しみ悩んでいる人は少なくないが、力になってあげるように尽くす努力を決して惜しまない。

出家（しゅっけ）

「出家」ということを、字義のままにとってはいけないのであって、「精神生活の転換」という意味に解釈しなければなりません。

出定（しゅつじょう）

禅定より出ること

出離（しゅつり）

穢土を出で離るるといふ。

迷いの世界を出て、種々の苦を離れること。

地涌の菩薩（じゆのぼさつ）

地べたから涌き出した菩薩というのは、苦しみや悩みの多い現実の生活を経験し、その中で修行を積み、そして世俗の生活をしていながら高い悟りの境地に達した人びとのことをいうのです。

須臾

短い時間。

ほんのわずかな間。

受用

その仏子の住しているところは、仏さまがご自分の住所として用いてくださるというのです、それが「受用」の意味です。

修羅

何ごとも自分本位に、自分の都合のいいように考える心です、「修羅のちまた」というのは、はげしい戦場の有様を形容することばになっていますが、ほんとうは利己心と利己心がみにくい争いをしている状態のことをいうわけです。

これが「修羅」です。

順化

仏の仏性を発見し、それを讃歎することによって、その人に自分の仏性を認識させてやることです。

順次の往生（じゅんじのおうじょう）
現世の命が終って次にただちに浄土に生まれること。

定（じょう）
心が決定して動かないこと。

調意（じょうい）
布施行を修めて惜しみ貪る心を調伏すること。

正因（しょういん）
浄土に生まれて仏にかならず成るたねと申すなり。

勝縁勝境（しょうえんしょうきょう）
仏をもみたてまつり、ひかりをもみ、異香（めでたき香、常にない妙なる香り）をもかぎ、善知識のすすめにもあはんとおもへとなり。

正憶念（しょうおくねん）

ものを正（ただ）しく考（かんが）えることができること。

浄行菩薩（じょうぎょうぼさつ）

浄行菩薩（じょうぎょうぼさつ）とは、法華経（ほっけきょう）に出（で）てくる菩薩（ぼさつ）で、大地（だいち）より湧（わ）きだした地湧（じゆう）の四菩薩（ぼさつ）のなかの第三番目（だいさんばんめ）の菩薩（ぼさつ）です。末法濁世（まっぽうじょくせ）に出現（しゅつげん）し法華経（ほっけきょう）を流布（るふ）すべく仏勅（ぶっちょく）をうけた、れっきとした目的（もくてき）を持（も）つ菩薩（ぼさつ）さまです。

正行六度（しょうぎょうろくど）

六波羅密（ろくはらみつ）を完全（かんぜん）に行（ぎょう）ずるという意味（いみ）。

所有広博の言（しょうこうはくのごん）

如来（にょらい）の所有（しょう）の広大（こうだい）な義理（ぎり）を博（ひろ）く説（と）くこと。

定散心（じょうさんしん）

定善（ていぜん）や散善（さんぜん）を修（しゅ）して往生（おうじょう）を願（ねが）い求（もと）める心（こころ）。

転（てん）じて自力心（じりきしん）のことをいう。

生死（しょうじ）

好きなものには欲深く執着し、好きなものが目の前に現れたり消えたりすること。

生死出離（しょうじしゅつり）

迷いの世界を出で離れること。

正宗分（しょうしゅうぶん）

そのお経の本論であり、中心となる意味をもった部分です。

小乗（しょうじょう）

釈尊入滅後に釈尊の教えの解釈の違いによって発生したグループの別名称で主に古い教団の考え方を指示したグループ名で「小乗」と呼ばれた。

清浄光（しょうじょうこう）

貪欲（むさぼり）の汚れがない光。

証誠護念（しょうじょうごねん）

念仏の法が真実であることを証明し、念仏の信心を謗難から護る。

正定聚（しょうじょうじゅ）

浄土（真実報土）に往生することが正しく定まり、必ずさとりを開いて仏に成ることが決定しているともがらをいう。

正しいことに決定したものの集まり。

証生増上縁（しょうしょうぞうじょうえん）

五種増上縁の一。

諸仏が衆生の念仏往生を保証し証明することをいう。

殊勝智（しょうしょうち）

すぐれた智慧

清浄平等無為法身（しょうじょうびょうどうむいほっしん）

煩悩（ぼんのう）のまじわらない清浄（しょうじょう）であり、無差別平等（むさべつびょうどう）の不生不滅（ふしょうふめつ）の真理（しんり）そのものである仏身（ぶっしん）。

小乗仏教（しょうじょうぶっきょう）

出家修行者（しゅっけしゅぎょうしゃ）のみが悟（さと）りが到達（とうたつ）できるという考（かんが）え方（かた）。

精進（しょうじん）

その人（ひと）の志（こころざし）が固（かた）くて、長（なが）い年月（としつき）のあいだ一心（いっしん）に仏法（ぶっぽう）を求（もと）めて怠（おこた）ることがない事（こと）。

定相（じょうそう）

常住不変（じょうじゅうふへん）の相（そう）

勝他（しょうた）

他人（たにん）に勝（すぐ）ろうとする思（おも）い、競争心（きょうそうしん）。

聖天

お大師さんが唐からお連れした仏さまは、みんな庶民的です。

聖天も、「お聖天さん」と呼ばれて親しまれています。

本来のお名前は「大聖歓喜自在天」、その聖と天をくっつけて「お聖天さん」また歓喜と天をくっつけて「歓喜天」ともいいます。

そのお姿は、頭は象で、体は人間の男女が、抱合って性交をしています。

男は大自在天の化身、女は十一面観世音の化身です。

聖道浄土の教

仏教全体を指す。

聖徳太子の「十七条憲法」第十条

「人みな心あり、心各々執れることあり。

彼是なれば我は非。

我れ是なれば、かれは非。

我れ必ずしも聖ならず。
彼必ずしも愚にあらず。
共にこれ凡夫なるのみ。」

浄入願心

国土荘厳、仏荘厳、菩薩荘厳として示される浄土の徳は、法蔵菩薩が生きとし生けるものを救いたいと願われた大悲の心にもとづくものであるから、因にかえしていえば阿弥陀仏の因位における願心におさまるということ。

正の観仏

1. 真観――浄土の仏身と仏土そのものを観想すること。
2. 仮観――浄土を観想するためのてだてとして、この土の日や水や仏像を観ずること。

上輩の三人

勧経に説く上品上生、上品中生、上品下生

常波羅密（じょうはらみつ）
無常なものへの執着から離れて常住のものをしっかりとつかまえる修行。

浄波羅密（じょうはらみつ）
浄らかな心で自他の差別（有相）を捨てきったところ。

成弁（じょうべん）
成就すること。
完成すること。

正法（しょうぼう）
「解脱堅固時」と「禅定堅固時」は、仏の教えが正しく守られ、正しく行われていること。

正法の精気（しょうぼうのしょうけ）
仏法僧の三宝のもつ功徳力。

常没の衆生（じょうもつのしゅじょう）

つねに迷いの世界に沈んでいる衆生。

声聞（しょうもん）

声聞とは、仏の教えを耳で聞き、そのきいたことをくりかえしくりかえし習うことによってある程度の悟りを得た人。

いいかえれば学習主義の修行者。

声聞乗（しょうもんじょう）

仏は「まず仏の教えを聞いて迷いを去れ」という学習主義。

小欲知足（しょうよくちそく）

世間的に欲が少なく足るを知るということです。

常楽我浄（じょうらくがじょう）

涅槃にそなわる四種の徳をあらわす。

諸有輪（しょうりん）

迷いの世界（まよいのせかい）をいう。

迷いの存在（まよいのそんざい）は果（は）てしなく輪廻転生（りんねてんせい）することから車輪（しゃりん）に喩（たと）えたもの。

所帰の仏智（しょきのぶっち）

衆生（しゅじょう）に帰順（きじゅん）される仏智（ぶっち）。

諸行往生（しょぎょうおうじょう）

種々（しゅじゅ）の善根（ぜんこん）を修（おさ）めて、その功徳（くどく）を因（いん）として浄土（じょうど）に生（う）まれること。

諸行無常（しょぎょうむじょう）

「諸行（しょぎょう）」というのは、「この世（よ）の中（なか）に現（あらわ）れるすべての現象（げんしょう）」という意味（いみ）です。

「無常（むじょう）」というのは、「常（つね）でない」すなわち「いつでも同（おな）じ状態（じょうたい）でいるものではない」ということは、つまり「変化（へんか）する」という意味（いみ）です、ですから、「諸行無常（しょぎょうむじょう）」ということは、「この世（よ）のすべての現象（げんしょう）は変化（へんか）するものである」という意味（いみ）なのです。

濁世の目足

教と行が五濁悪世の行者の目となり足となること。

書写

経文を書写すること、および文書によって布教すること。

初随喜

ただ、頭だけで「解った」とか「なるほどそうだ」とおもったのでは、まだ信仰したとはいえません。「ああ、ありがたい」という魂の喜びを覚えたとき、はじめて信仰の境地にはいったわけで、初めて随喜の心を起こしたのですから、これを「初随喜」といいます。

自余の行

念仏以外の行業

諸波羅蜜

六波羅蜜などの菩薩の修行。

序分

そのお経が、いつ、どこで、どんな程度の人々を相手に説かれたのか、なぜそのお経を説かねばならなかったかそしてまた、そのお経にはどんな意味のことが説かれているかという大要などが書かれてある部分。

諸法

ほんとうの実在

諸法実相

一切の存在の真実のすがたをいう。

諸法無我

「諸法無我」というのは、「この世の中のすべてのものごとは、必ずほかのものとつながりがあるもので、全然他と切り離されて孤立しているもの（すなわち我）はない」ということです。

四楽

断受楽、寂静楽、覚知楽、不壊楽。

心光（しんこう）
大智大悲の仏心をもって救済する摂取の光明。

親近処（しんごんしょ）
世間の人びととの交際上つつしむべきこと。

深正念（じんしょうねん）
三昧における寂静の心境

信心開発（しんじんかいはつ）
他力回向の信心が衆生の心中にはじめてひらきおこること。

真身観（しんしんかん）
『観経』に説く十六観法の第9観。
阿弥陀仏の身相光明を観ずる法。

深信観成

仏の教えによって、心がつねに法悦に満たされておれば、この現実の世界が楽しくて楽しくて仕方のない所に一変するのです。

どこを見ても美しく、だれを見ても菩薩に見えるのです。

すなわち、その人の表面のみにくさを突き抜けた奥の奥にある平等の仏性を見ることができるのです。

これが、信仰者としての最高の境地であって、

このことを「深信観成」といいます。

真智は無知なり

真智は実智、如実智ともいい、無分別智のこと。

ものの本質のありのままが平等で不二であることをさとる智。

無知とはすべて因縁によって生じたものは実体がなく空であるから、そこには対象的に知るということもないとの意。

神通

如来の本体にそなわっている広大無辺な「生かす力」が、ありとあらゆる衆生にはたらきかけるとき、

そのはたらきを妨げるものはまったくなく、まことに自由自在な力を及ぼされるということ。

神通如意
思うがままに、なにごともできる不思議なはたらき。

進道の資糧
仏道を進むためにたすけとなるもとで。

瞋恚
怒り

瞋恚・増嫉
「おもてに怒り、心に怒り嫉み妬むなり」

真如
絶対的な真理であり、それだけがつねに実在するもの。

真如三昧（しんにょざんまい）
虚妄分別をはなれ、ありのままの真実の姿をさとった境地。

真如の門（しんにょのもん）
「法身のさとりを開く身とうつり入るとまうすなり」第十八願の他力念仏をいう。

心不退（しんふたい）
信心が退転しないことで、現生不退のこと。

信不退（しんふたい）
阿弥陀仏の本願を信ずる一念に浄土往生が決定すると信ずること。

信謗（しんぼう）
信じる者とそしる者。

正定聚の位に定まることをいう。

随縁の雑言

如来によって選定された行ではなく、その人々の機縁にしたがって修行する、煩悩のまじった善行。

随喜

他の人がなした善行をよろこぶこと。

出広長舌

これは、仏さまが非常に大きな舌をお出しになって、その舌が梵天までとどいたというのです。これはインドの習慣にもとずくことであって、「昔のインドでは、舌を出すのは、自分のいったことは誓って真実である」ということを表す行為でした。

仏さまが無限に広くて長い舌を出されて、それが最上の天界まで達したということは、仏さまのいままでお説きになった教えがすべて真実であり、永遠に真実であることをしめされたのです。

随自意説（ずいじいせつ）
仏自身（ほとけじしん）の意（い）にしたがって説（と）くこと。

随自他意説（ずいじたいせつ）
自他（じた）の意（い）にしたがって説（と）くこと。

随心供仏（ずいしんくぶつ）
こころにしたがいて仏（ほとけ）へ供養（くよう）するという。

随他意説（ずいたいせつ）
仏（ほとけ）が相手（あいて）の素質能力（そしつのうりょく）に応（おう）じて、その意（い）にかなった法（ほう）を説（と）くこと。

睡眠増（すいみんぞう）
意識（いしき）がぼんやりして心身（しんしん）の反応（はんのう）がおこりにくい状態（じょうたい）。
心（こころ）の鈍重（どんちょう）なこと、煩悩（ぼんのう）の一（ひと）つ。

是学無学（ぜいがくむがく）

なを学ぶべき余地を残す者と、もはや学ぶべきことのない者。

誓願（せいがん）

誓願を起こすというのは、ただ願うだけではありません、それに対してあらゆる努力をすることです。

誓願一仏乗（せいがんいちぶつじょう）

阿弥陀仏の誓願によって成就された南無阿弥陀仏は生きとし生ける者を平等に成仏せしめる絶対唯一の教法であるという意。

誓願不思議（せいがんふしぎ）

阿弥陀仏の誓願は人間の思慮分別や議論をこえているので不思議という。

施眼（せげん）

如来は衆生に智慧の眼を施されるから。

世自在王仏

世自在王は梵語ローケーシュヴァラ・ラージャの漢訳、世間一切法に自在なることを得、世間を利益するに自在を得た仏という意。

摂化随縁

衆生の機縁に従って教化すること。

摂取不捨

阿弥陀仏が、法蔵菩薩のとき四十八願を立てられた中の、第十八番目の願いをいい、その意味は、生きとし生けるものすべてを摂いとらずには、私(菩薩)は仏にならないと誓ったという。

摂生増上縁

衆生をおさめとって浄土に往生しめるすぐれたはたらき。

舌相を出し

仏の三十二相の一で広長舌相といわれる。

教説の真実であることを証明するという意味を持つ。

世の八法

利（利得）、衰（損失）、毀（かげでそしること）、誉（かげでほめること）、称（面前でほめること）、譏（面前でそしること）、苦、楽。

選択摂取の白業

浄土に生まれゆくために、仏より回向された清浄な行業。

仏の名号を指す。

専修正行

もっぱら念仏の正行を修する意で、自力を離れてただ念仏をする浄土真宗の宗義をいう。

禅定

・いつも静かで、安定した心。

・どんなことがおこっても動揺することのない静かに落着いた心。

禅定堅固（ぜんじょうけんご）
心静かに瞑想する修行がよくおこなわれること。

施陀羅尼（せんだらに）
さらにすすんで陀羅尼を他へ及ぼす感化力。

善知識（ぜんちしき）
知識というのは知り合いということで、善知識といえば善い友ということになりますがそれには、「友」であると同時に「指導者」という気持ちの含まれたことばです。

・よきとも
・巧みなる教化者。
・仏教の道理を教え導き、仏道に入らせ、さとりを得させる人。
・また仏道に入らせる縁を結ばせる者や共に仏道を励む人をいう。

千輻輪のあなうら（せんぷくりん）

仏の三十二相の一。
仏の足の裏にある、千の放射状の模様。

先仏

釈尊のご出世以前の過去の世におけるもろもろの仏。

善本徳本

「因位を善本という、果位を徳本という。」
仏の因果の徳をおさめた名号のこと。

僧

僧というのは「僧伽」の略であり、サンガというのは梵語で「密接な結合」という意味です。

相応一念

信の一念が仏智に相応すること。

総願（そうがん）

どんな人々にも共通な「願」で、仏教徒として「仏の教えを学び、煩悩を断ち切ろうと考えるのはだれにも共通な願いです。

「自分が悟ることによって、多くの人のためになろう」と考えるのもそうです。

そういう「願」を「総願」というのです。

その「総願」は四つあって、これを「四弘誓願」といいます。

総合（そうごう）

全体を大きくまとめて考えてみて、はじめて全体につうずる真理というものが確かめられるのです。

相好荘厳（そうごうしょうごん）

仏のすがたも実体的にあるのではなく、それがそのまま色も形もない絶対の真理そのものにかなっていること。

荘厳畢竟（世間畢竟）（しょうごんひきょう（せけんひきょう））

仏果を得るための因行である六波羅蜜。

総持

・梵語ダーラニーの漢訳。

・陀羅尼と音写

・仏の教えの精要をわずかな言語におさめた章句のこと。

1. よくすべてをおさめ保って忘れない力。

ひとつのことがらを記憶することによって、あらゆることがらを連想して忘れない記憶術。

2. 万善万行を欠けることなく円かに具えた名号のこと。

3. 智慧のこと。

造時堅固

寺院造築が盛んに行われること。

増上縁

すぐれた因縁。

縁となって果を引かせる強いはたらき、また因か果になることをさまたげないこと。

浄土往生を得しめる阿弥陀仏の勝れた力。

増上慢

「増上慢」というのは、すこししか悟っていないのにすっかり悟っているように思い、すこししか知っていないのに大いに知っているように錯覚する慢心です。

雑染堪忍

煩悩にけがされ苦しみに堪え忍ばねばならない娑婆世界。

像法

正法のあとの「多聞堅固時」と「多造塔寺堅固時」は仏法が像の上だけでものこっている時代ですから、この千年を像法の時代といいます。

息災延命

七難をとどめ、いのちを延べたまうなり。

即身成仏

この世でこの身のままで仏に成る。

即身是仏

この身そのままが仏である。

◇

第一義空

究極の真理である空。

虚妄なる凡夫の認識を離れた絶対的境地。

大会衆

阿弥陀仏の説法の会座にあつまっている多くの聖衆という意。

親鸞聖人は念仏者は現生にありながら、浄土の眷属たらしめられているので、現生正定聚のことを大会衆といわれた。

大応供（大安慰）

阿弥陀仏の異名。

衆生に大いなる安らぎとなぐさめを与える徳をそなえているという意。

対機説法

釈尊は対機説法といって相手の機根に応じ、その場合、場合に応じて、自由自在に法を説かれた。

大黒天

昔、大黒さまは大摩尼珠王如来であったと言われています。

しかも、「お金が欲しい」という娑婆世界の人々の願いを聞いて、大福徳円満自在菩薩となり大黒天に姿を変えたのだと言われています。

では、なぜ大黒なのかと言うと、インド名マハー・カーラと言います。

マハーは大きい、カーラは黒で大黒なのです。

インドの象の神様ともいわれています。

さて、行者姿になった大黒さまは、お釈迦さまの前で、「世界のあらゆる貧困をなくして、みんなが豊かに

暮らせるようにしたい」と願いを立て、さらに、「私の名前を唱えたり、木像に彫って部屋に安置するならば、七代にわたってお金の福をさずけましょう」（「大黒天円満陀羅尼経」）と誓うのです。

また、インドや中国において大黒天は寺院の台所に二、三寸の座像で安置されたことから日本のお寺でも台所の守り神として、祭られてきました。

また、大黒さんのまつられている台所と座敷の間に立てる柱のことを、「大黒柱」というのは、このことからです。

大士

龍樹菩薩、天親菩薩

帝釈天

帝釈天のルーツはインドにあります。それも紀元前千数百年前にもさかのぼれるほどで、帝釈天のインドの名は「インドラ」で因陀羅、天帝釈等と訳されています、稲光りをひからせ雷鳴をとどろかして、豪雨をもたらす雷を神格化したものです。

この帝釈天が仏教にとり入れられると、護法神として崇められました。

大寂滅（だいじゃくめつ）

一切の法は本来空寂であるという空理。

大乗（だいじょう）

小乗という呼称に対して呼ぶグループ名で釈尊入滅後に発生した、仏法の解釈の問題で、年月と供に、ゆがめられ、生き生きした力を失ってゆく仏法を見て、「このままにしておいてはいけないどうしても釈尊の本当のお心にかえさなければならぬ」という熱烈な願いが主として在家信者のあいだに起こってきました。そうしてできた新興グループが大乗仏教の教団です、大乗というのは、「よい乗り物」という意味で、仏の世界に達するためのよい乗り物であるというわけです。

大乗仏教（だいじょうぶっきょう）

「他の人々を救済することを前提にしてのみ、自分自身の救済が達成される」という考えであらゆる人を悟りにもたらす教え。

言うまでもなく「大乗」とは大きな乗り物の意味。

大悲伝普化（だいひでんぷけ）

如来の大悲を万人に伝えること。

大悲の心

人を苦しめたり、生き物を殺したりすることを好むものには、かわいそうだという心を起こさせて、生きものを苦しめたり殺したりしないばかりか、逆に苦しんでいるものを救いたいという心。

多生曠劫

多くの生をうけ、長い時をへだてた無限の時間。

他身

本体が然燈仏とか阿弥陀如来というように、他のある相をとってあらわれた仏のことです。

他心智

六神通の一。他心通ともいう。
他人の心を知る智慧。

多宝証明の往事

説法をする釈尊の前に多宝如来があらわれて、釈尊の説法の真実なることを証明したという故事。

多聞堅固

仏の教えがよく聞かれ、よく理解されること。

陀羅尼門

大勢の人間を導いて、わるいことを止めさせ、よい行いをすすめていく力。

他力大行の督促

阿弥陀仏の本願の働き。

他力本願

浄土教系の仏教で用いられる言葉で、他力というのは阿弥陀如来が一切の衆生を救いとって浄土に生まれさせないではおかないと誓われた本願のもつ力をいう。

但有専念阿弥陀仏衆生

ひとすじにふたごころなく弥陀仏を念じたてまつると申すなり。

弾琴の教え

釈尊が守篭那という比丘に説いた教えで「精進にかたよると、心が緊張しすぎて静かでありません。精進が緩やかすぎると、懈怠におもむくのです。ですから、平等の精進に住し、諸根の平等を守りなさい。そして、『中』の相をとるように心がけることです。」

智

仏が一切のものの差別の面も知り分けておられる。すべてのもののちがっている点を見分ける力です。

智慧

正しいものの見方、ものごとのほんとうの姿を見分ける力。

この世の中のすべてのものごとの本質をよく見通し、ものごとが起こったり、移りかわったりする理法を正しくしっていることです。

智慧光

愚痴（おろか）を除く光。

智願海

阿弥陀仏の広大にして深遠な智慧から起こった本願であるから智願といい、その徳を海に喩えた。

畜生

智慧が全然ない状態です。

愚かなことです。

ものの理というものがわからないために、ただもう本能の命ずるとおり、前後の考えもなくやりたいことをやる状態これが「畜生」です。

知見波羅密

すべてのものごとのほんとうの姿を見極める力。

智炬（ちこ）
智慧の灯火

智・慈・行（ち・じ・ぎょう）
智―文殊菩薩
慈―弥勒菩薩
行―普賢菩薩

智者（ちしゃ）
人生の意義をほんとうにわかった人。

智分（ちぶん）
智慧の分斉の智慧のはたらき。

智目・行足（ちもく・ぎょうそく）

さとりをひらくために必要な智慧の目と修行の足。

中諦（ちゅうたい）

「空」の見方にも「仮」の見方にもかたよらず、その両方を総合した見方をするのがほんとうに正しいものの見方であってこれを「中諦」といいまた「中道」というのも、ほぼ同じことです。

中道（ちゅうどう）

中道というのは、「一方にかたよらない」ということですがしかしそれは「右にも左にもかたよらないちょうどまん中」という意味ではありません。

釈尊のお説きになった、「中道」は、「ちょうどまん中」というような固定したものではないのです。

超日月光（ちょうにちげっこう）

日や月の光のようにこの世界だけを照すのではなく、全宇宙を照す光。

通一仏土（つういちぶつど）

十方世界には区切りがなくなって、どこへでも自由自在に行けるようになり（通達無礙）、この宇宙間がすべて一つの仏土のようになってしまうということ。

通故

例外のない道理の意。

罪

生命のあたりまえの歩みをとめること、またはあとへもどることをいう。

生命向上の原則からいって当然なすべきことについて、自分にできるかぎりの努力をしないこと、これが「生命の歩みを止めること」で、これは消極的な「罪」であり、悪であります、まして人を苦しめたり、おとしいれたり、人の財産をうばったり、戦争をしたり、殺しあったりするようなことは、生命向上の道をあともどりする行いですから、大きな罪であり、積極的な「罪」であり、「悪」であります。

天眼

「天眼」というのは、理詰めに追究していって、その物の本質を見分ける見方です。

だから、普通の人に見えないものを見る能力のある人を、むかしは「天眼通」などといったものでした。

天上

歓喜の世界です。

しかし、これは仏の悟りによって得たほんとうの喜び、すなわち変化することのない喜びでは、ありません。肉体や感情の喜び、つまり迷いのうえの喜びですから、何かいやなことが起こればすぐ地獄道や餓鬼道や修羅道などへまっさかさまに落ちる可能性のある、ほんの仮りの喜びです。

有頂天というのはこの状態のことです。

天中の天

五天すなわち、世天、生天、浄天、義天、第一義天

顛倒

ものごとを逆さまに考えて、実相を見間違うことです。

凡夫の四顛倒といって次のものがあります。

1. 常顛倒――――変化するものを変化しないと見る。
2. 楽顛倒――――「苦」であるものを、一時的現象を見て「楽」とかんがえる。

3．浄顛倒――――不浄なものを表面の姿だけを見て「浄」とかんがえる。

4．我顛倒――――諸法は無我であって、みんな持ちつ持たれつであるのを自分だけで立っていっているように考える。

天然崇拝

自然物に対して、「恐れ」を感じ、それが「畏れ」とかわり、ついにそのようなものを神として拝むようになったのです。

そのような信仰を「天然崇拝」といいます。

転法輪の因

釈尊の説法を広めるもと。

同行

共に念仏の教えを聞き行ずる人々。

浄土真宗の信者は心を同じくして道を行ずるものであるから同行という。

等正覚（諸仏正遍知海）（とうしょうがく　しょぶつしょうへんちかい）

正遍知は梵語、サンヤク・サンブッダの漢訳で如来十号の一。海とは仏のあまねくさとられた智慧の広大なことを海に喩えたことば。正しく完全に真理をさとったあらゆる仏陀たちの意。

闘諍堅固（とうじょうけんご）

争いが盛んになること。

当生の処（とうしょう　ところ）

未来に生まれるべきところ。

同体の大悲（どうたい　だいひ）

同じ悟りの智慧から起こる大悲。

道平等（どうびょうどう）

諸仏の悟りが平等で同一なこと。

同味（どうみ）
「法華経」と同時に説かれた「観経」には、同じ醍醐味たる一乗円教がとかれている。

独覚無上（どくがくむじょう）
独り無上を覚る。

読誦（どくじゅ）
・経典の文字を見て声を出して読むのを「読」
・文字を見ないで声を出して読むのを「誦」という。

読誦大乗解第一義（どくじゅだいじょうげだいいちぎ）
大乗の経典を読み、第一義すなわち最高の真理を理解すること。

得生の想（とくしょうのおもい）
必ず浄土往生を得られるであろうという想い。

得度（とくど）
さとりの世界に渡り入ること。

得道（とくどう）
さとりの智慧を得ること。

徳本（とくほん）
悟りをえるための根本となる善い心。

独無等侶（どくむとうりょ）
世にならぶものがないほど尊い方。

抖擻（とそう）
心身を悩ます全ての欲望(我利、我欲＝煩悩)を振り払い、心を磨いて真の人間道に目覚めるよう精進努力することをいいます。

度無所度（どむしょど）

大菩薩は、衆生は本来空なりと悟るが、ゆえに済度しても、済度してやったという、とらわれの思いが全くないこと。

貪（どん）

人のもっている物をむやみに欲しがる心。

◇

内典外典（ないてんげてん）

仏教の典籍と仏教以外の儒教などの典籍。

南無（なむ）

「南無」というのは、梵語そのままの音を漢字であらわしたもので、その意味は「帰命」ということです。

「帰命」というのは、全身全霊を投出して、「お任せします」と「法」の中へ溶けこんでいくことです

そして、その瞬間身が震えるほどに感ずる「ありがたい」という法悦感も、この二音の中に篭められています。

サンスクリット語の〝ナマス〟〝それが変化して〟ナモー〝となった語を音訳したことば「帰依する」といった意味。

難化能化（なんげのうけ）
教化し難いものを導いて教化する。

難思議往生（なんじぎおうじょう）
第十八願の弘願念仏による真実報土への往生をいう。
難思議とは不可思議という意で「大経」の第十八願の法は因果ともに不可思議であるから難思議という

難思光（なんじこう）
悟りの浅い人には想い及ばない光。

難信の法（なんしんのほう）
自力をもっては決して信ずることができない法門の意で、この経に説かれた念仏往生の教えを指す。
この教えは、世間の道理を超越しているから、世間の常識や自力心では、はなはだ信じ難い法ということ。

そのことはまたこの法の尊高をあらわしている。

難値難見

あうことも見ることも難しい。

二教

漸教と、頓教

肉眼

「肉眼」というのは、普通の凡人のものの見方です。

凡人には、形にあらわれていることだけしか目にはいりません。

それも、往々にして、まちがってみえたり、不充分にしか見えなかったりするものです。

二乗

・声聞と縁覚のこと。

・大乗と小乗。

二処三会（にしょさんえ）

「法華経」が説かれた場所を「二処三会」といって、最初に霊鷲山で説かれ、つぎに虚空において説かれた。すなわち二箇所で三回の説法が行なわれたわけです。

二智（にち）

諸法の空理をさとる根本無分別智（実智）と、差別の事相を知る後得智（権智）のこと。

二辺遠離（にへんおんり）

仏教では極端な見解を「辺」といい、相い対立する両極端を離れよと主張します。

二報荘厳（依正二報）（にほうそうごん（えしょうにほう））

仏身（正報）と仏国土（依報）の荘厳。

入定（にゅうじょう）

禅定に入ること。

入定聚不入対（にゅうじょうじゅふにゅうたい）

この世で、念仏の行者は、正定聚の位に入り、諸善の行者は入らない。

入聖得果（にゅうしょうとくか）

聖者の位に入って証果（さとり）を得ること。

入道（にゅうどう）

在俗生活のままで剃髪して仏門に入った男性をいう。

柔軟心（にゅうなんしん）

物事にとらわれない心。

入不二の法門（にゅうふにのほうもん）

煩悩即菩提、生死即涅槃という諸法不二をさとる法門。

如（にょ）

・真理（しんり）
・常住（じょうじゅう）ということです、いつも存在（そんざい）して変（かわ）ることがないということです。

如来（にょらい）

「如（にょ）」とは「真理（しんり）」の意味（いみ）である。
つまり、如来（にょらい）とは、真理（しんり）の世界（せかい）からこの世（よ）に来現（らいげん）されたほとけである。

如来の異（い）の方便（ほうべん）

釈尊（しゃくそん）の説（と）かれた、弘願（ぐがん）と異（こと）なる方便（ほう）の法。

人間（にんげん）は不定（ふじょう）のさかひ

人間界（にんげんかい）は生滅変化（しょうめつへんか）する無常（むじょう）の境界（きょうかい）であるということ。

人師（にんし）

人を導く師匠。

忍辱

しのび難きをしのび、耐え難きをたえる心。

涅槃寂静

覚りの境地。

「迷いをすっかり吹き消してしまってこそ、人生苦というものがすっかりなくなって、平穏な、安定した生活が得られるのだ」という教えです。

涅槃畢竟の真因

さとりに至るまことのたね。

能帰の心

仏智に帰順する衆生の信心。

能化所化（のうけしょうけ）

能化とは教化するもので師匠のこと、所化とは教化せられるもので弟子のこと。

能断物疑（のうだんもつぎ）

「能く物疑を断じて、法を説くこと無畏なり」です、「物疑」というのは、いろいろな疑いという意味です。

能入（のうにゅう）

よく浄土に入ることのできる因のこと。

能念所念（のうねんしょねん）

能念とは信ずる心、所念とは信ぜられる法。

◇

背正帰邪（はいしょうきじゃ）

仏教の正理に背いて、邪道に帰すること。

破見（はけん）
邪悪な見解をいだき、正見を破壊すること。

破僧（はそう）
破和合僧の略。

八邪（はちじゃ）
八つのまちがった心と行い。

八正道（八聖道）（はちしょうどう　はちせいどう）
涅槃寂静に到る道。
すなわち下記の八つである。
正見――――正しい信仰。
正思――――正しい思惟。
正語――――正しい言葉。

正業――正しい行為。
正命――正しい生活。
正精進――正しい努力。
正念――正しい憶念。
正定――正しい瞑想。

八難（はちなん）

仏の教えにはいることのできないような八つのよくない境遇のことをいいます。

八菩薩（はちぼさつ）

正法を護持し衆生を護る。

文殊師利・観世音・大勢至・無尽意・宝壇華・薬王・薬上・弥勒

八幡大菩薩（はちまんだいぼさつ）

全国に二万数千あるといわれる八幡神社の大本は、九州大分県にある宇佐八幡宮です、祭神は現在、応神天皇、比売神、神功皇后の三柱とされていますがその起源については謎が多く、いろいろな学説が提出

されています。
八幡神の本地仏が釈尊または阿弥陀如来であるという信仰は有名で、僧形の神像が造られて、今に伝えられています。

八功徳水想（はっくどくすいそう）
常に仏を念じ、法を念じ、僧を念ずることを讃ふ事。

八宗兼学（はっしゅうけんがく）
三輪・成実・法相・倶舎・華厳・律・天台・真言の八宗の教義を体得している。

般若（はんにゃ）
「如来知見」ともいい、本当の智慧。

般若波羅密（はんにゃはらみつ）
諸法実相の智慧。

彼岸（ひがん）
あちらの悟（さと）りの岸（きし）。

非義（ひぎ）
理屈（りくつ）に合（あ）わないこと。

比丘（びく）
男（おとこ）の出家者（しゅっけしゃ）。

比丘尼（びくに）
女（おんな）の出家者（しゅっけしゃ）。

非権非実（ひごんひじつ）
「中道実相（ちゅうどうじっそう）の教（おし）えなり」
方便（ほうべん）と真実（しんじつ）を差別（さべつ）する立場（たちば）を超（こ）えた絶対真実（ぜったいしんじつ）の教（おし）えで、中道（ちゅうどう）とも実相（じっそう）ともいう。

非権非実の理

方便（権）即真実（実）と達観し、中道の理（有無の二辺を離れていること）にかなっていること。

非作の所作

人間の分別を離れ、あるがままにおのずとなされた働き。

卑湿の淤泥

湿地の泥沼に蓮の花が咲くように衆生の煩悩の泥の中に如来回向の信心が生ずることを喩えたもの。

毘沙門天

毘沙門天は、ヴァイシュラヴァナを吠室羅末拏と音写して、それが訛って毘沙門となり、多聞、普聞、種々聞と漢訳されています。

インドの古代神話の中では闇黒界に住む悪霊の主長とされていましたが、ヒンズー教の叙事詞「マハーバーラタ」の中ではクベーラと名付けられて財宝福徳を司どり、夜叉を家来として雪山中のカイラーサに住んで北方を守護する善神とされています。

仏教にとり入れられてからも、これらの性格がそのままひきついで、須弥山の中腹にあって、北方を守護

する護法神として崇められています。

「法華義疏」には普聞あるいは多聞の名を解説して、「福徳が善く四方に聞こえているから普聞といい、常に如来の道場を護って法を聞いているので多聞と名づけるのだ」と説いて、護法神と福徳神とを兼ねた天神であることを説いています。

悲心招喚（ひしんしょうかん）

大悲心をもって浄土へ来れと招きよぶこと。

譬説（ひせつ）

譬え話によって解りやすくお話しになること。

非善（ひぜん）

善悪という相対的なものを超えているという意。

畢竟（ひっきょう）

究極の絶対的なという意。

畢竟依（ひっきょうえ）
究極（きゅうきょく）の依（よ）りどころとなる仏（ほとけ）という意（い）。

畢竟寂滅（ひっきょうじゃくめつ）
煩悩（ぼんのう）を滅（めっ）した究極的（きゅうきょくてき）なさとりの境地（きょうち）。

畢竟涅槃にあらざる（ひきょうねはんにあらざる）
如来（にょらい）は絶（た）えず生死（せいし）の迷（まよ）いの世界（せかい）で活動（かつどう）されるから、涅槃（ねはん）にとどまらないという意（い）。

必至滅度（ひっしめつど）
必（かなら）ず仏（ほとけ）のさとりを得（え）ること。
第十一願（だいじゅういちがん）によって与（あた）えられる利益（りえき）。

畢命（ひつみょう）
生命（せいめい）の終（お）わること。

誹謗正法（ひほうしょうほう）
仏の正しき教法をそしること。

白毫相（びゃくごうそう）
仏の三十二相の一、眉間に右にめぐる白く細い毛のうずまきがあり、そこから光を放つ。

白毫相の光（びゃくごうそうのひかり）
釈尊の眉間から放たれた光。
諸法の実相を見通す仏の智慧。

辟支仏（びゃくしぶつ）
縁覚すなわち体験主義の修行者。

百即百生（ひゃくそくひゃくしょう）
善導大師の「礼讃」の言葉で、信心の人は一人ももれず往生できるということ。

白法隠滞（びゃくほうおんたい）
仏（ほとけ）の教（おし）えがかくれとどこおること。

白法隠没（びゃくほうおんもつ）
仏法（ぶっぽう）（白法（びゃくほう））がこの世（よ）から姿（すがた）を消（け）し去（さ）ること。

百法明門（ひゃっぽうみょうもん）
菩薩（ぼさつ）が初地（しょち）の位（くらい）において得（え）る法門（ほうもん）のことで、あらゆる法門（ほうもん）を明瞭（めいりょう）に通達（つうたつ）した智慧（ちえ）の意（い）。

平章（ひょうしょう）
道理（どうり）を正（ただ）しく明（あき）らかにすること。

平等（びょうどう）
ものはみな平等（びょうどう）（空（くう））。

平等法身（びょうどうほっしん）

相対的差別の世界を離れ、平等の真理をさとった身。

平等力（びょうどうりき）

阿弥陀仏の三十七号の一。

阿弥陀仏の願力は往生人をして平等のさとりを得させたもうから、阿弥陀仏のことを平等力ともいう。

貧苦（びんぐ）

智慧も能力も貧しい者。

不覚（ふかく）

真理は悟るものではなく、悟られるものであるので不覚という。

不可称不可説不可思義（ふかしょうふかせつふかしぎ）

ことばもこころも及ばない功徳のはかりしれないことをいう。

福智の二厳

・福徳荘厳と智慧荘厳。

福徳荘厳とは六波羅密行の中の布施、持戒、忍辱、精進、禅定の五をいう。

智慧荘厳とは般若波羅密をいう。

不共の利生

諸仏の救いにもれた女人・悪人を往生させる阿弥陀仏の本願のすぐれた独特のはたらき。

不簡善悪の法

善人と悪人とを区別しない教法。

普賢の徳

浄土に往生したものが再びこの世に還り、普く衆生を済度するという大慈大悲の徳。

普賢菩薩

普賢菩薩は無量の行願をすべて具え、普く一切の仏国土に現れるという菩薩です。

六牙の白象に乗る普賢菩薩と獅子に乗る文殊菩薩、釈迦如来を中心とするこの三尊像は、私たちになじみ深いお姿です。

この時の普賢菩薩は仏の理・定・行の徳を司どる、いわば仏陀の大悲の行を象徴する上道の菩薩として、文殊菩薩と両々相まって仏教の理想を実現するという意味を持つ尊像です。

また一方では、単独で信仰の対象として崇められてきました。

不二の心

観ぜられる対象（境）の徳、すなわち実相（絶対の真理）と観ずる心とが境智不二となった心をいう。

不惜身命

法が第一であるということに徹する事。

普授

授は授記のこと。

未来において最高のさとりを得るであろうことを仏が予言することをいう。

普授とは一切衆生に授記することをいう。

不定聚（ふじょうじゅ）
善（ぜん）にも悪（あく）にも定（さだ）まっていない人（ひと）たちの集（あつ）まりです。

不浄説法（ふじょうせっぽう）
自己（じこ）の名誉（めいよ）や利益（りえき）のために説法（せっぽう）すること。

不浄説法のとが（ふじょうせっぽうのとが）
名誉（めいよ）・利益（りえき）を求（もと）め、他（た）との競争心（きょうそうしん）から説法（せっぽう）する罪（つみ）。

布施（ふせ）
物心両面（ぶっしんりょうめん）からの贈（おく）り物（もの）をする。

不断光（ふだんこう）
断（た）えずかがやいている光（ひかり）。

仏（ぶつ）

1．法身（ほっしん）、2．報身（ほうじん）、3．応身（おうじん）、4．化身（けしん）

仏慧功徳（ぶっえくどく）

仏（ほとけ）の智慧（ちえ）と依報（えほう）（環境世界（かんきょうせかい））・正報（せいほう）（仏菩薩（ぶつぼさつ））の功徳（くどく）。

仏眼（ぶつげん）

あらゆるものの見（み）かたのうちで最高（さいこう）の見（み）かたです。すべてのものの実相（じっそう）を見通（みとお）すだけでなく、慈悲（じひ）の心（こころ）をもってそれを見（み）るのです。

仏事（ぶつじ）

すべての人間（にんげん）を教化（きょうか）し済度（さいど）する仏（ほとけ）のはたらきという意味（いみ）です。

仏所護念（ぶっしょごねん）

仏（ほとけ）が深（ふか）くお護（まも）りになって機（き）が熟（じゅく）さなければお説（と）きにならぬ教（おし）え。

正しくひろまるようにと仏がつねに護り念じておられるということ。

仏足石

仏陀の足跡を石に彫った仏足石は、釈尊の、お姿を形にすることを畏れ慎んだ初期の仏教徒達が、仏足頂礼の敬虔な心から造ったものです。

仏知見

如来の眼で見通されたこと。

仏智無生の妙願力

悟るための智慧をそなえたすぐれた本願の力。

仏の常

仏は常住で、生滅変化しないという意。

不動明王（ふどうみょうおう）

「お不動さん」とよばれて庶民に人気があります。大日如来の化身とも言われています。

普遍智（ふへんち）

あまねく行きわたる智慧。

分別（ふんべつ）

・むやみとものごとに好き嫌いの別。
・人を分けへだてする。

平生業成（へいぜいごうじょう）

平生に仏法にあう機にとりてのことなり。

別異の弘願（べついのぐがん）

一般の因果の道理にこえすぐれた他力救済の本願をいう。

別願（べつがん）

その人の性格（せいかく）に応（おう）じ、才能（さいのう）に応（おう）じ、職業（しょくぎょう）に応（おう）じた特別（とくべつ）の願（ねが）いです。

弁才智慧（べんざいちえ）

自由自在（じゆうじざい）な理解力（りかいりょく）および言語表現能力（げんごひょうげんのうりょく）。
四無碍智（しむげち）のこと。

弁才天（べんざいてん）

ひとえに弁天（べんてん）さまは美人（びじん）の代名詞（だいめいし）なのです、しかし、もともとの役割（やくわり）はひと言（こと）でいうと、お坊（ぼう）さんのホステス役（やく）なのです。

ある時（とき）お釈迦（しゃか）さまが「最勝王経（さいしょうおうきょう）」を説法（せっぽう）していますと、弁才天（べんざいてん）（インド名（めい）・サラスバテー）は立（た）ち上（あ）がって、「お坊（ぼう）さんでこのお経（きょう）を他（た）の人（ひと）に説（と）かれることがあったら、お助（たす）けいたします。もし、お経（きょう）の文字（もじ）を忘（わす）れたり、意味（いみ）がわからなくなったなら、私（わたし）が記憶（きおく）しておいて、そっと影（かげ）からお教（おし）えいたしますわ」と誓（ちか）いを立（た）てます。

総（そう）じて弁天（べんてん）さまの御利益（ごりやく）は智慧（ちえ）、記憶（きおく）、弁舌（べんぜつ）からはじまって名誉（めいよ）、福徳（ふくとく）などとなっていきます。

また弁天（べんてん）さまは音楽（おんがく）の神様（かみさま）でもあるのですが、インド名（めい）が心地（ここち）よいせせらぎをかなでる大河（たいが）サラスバテイ

を神格化したことによるらしいのです。

日本でも詩歌管弦の仏さまとして信仰を集め、このことから、美音天女とも妙音天女、妙音天ともいわれるようになり、平安貴族の間で信仰がひろまっていったそうです。

ちなみに竹生島（琵琶湖の北部）の弁天さまと鎌倉の江ノ島の弁天、安芸厳島の弁天さまの三つが「日本の三弁天」と言われています。

偏執（へんしゅう）

自分の考えに固執すること。

辺地（へんち）

仏の教えとは縁のない極端な世界。

法（ほう）

・一切のものごと。

・宇宙に通ずる真理。

・仏の教えという意味。

・世の中のすべてのものごと。

放逸無慚

勝手気ままな行動をし、自己の心に恥じることのないこと。

報応化

・報身・応身・化身

法王子

仏を法王というのに対し、その仏を嗣ぐ位を得た菩薩を法王の嗣子という意味で法王子と名づける。

宝王如来の性起の義

如来の身口意のはたらきはすべて法性の顕現にほかならないと説いていること。

性起とは法性現起の意で、仏果の万徳は法性そのままのあらわれであるとの意。

法楽楽

無漏の智慧より生ずる楽で仏法の楽しみである。

法眼

「法眼」というのは、芸術的なものの見方です。

報身

仏の本体がわれわれの理解できるような相をとられた仏。

1. 弥陀
2. 釈迦
3. 十方

法世

仏の教えを与える。

法説

仏が教えをお説きになること。

方等（ほうどう）
平等に救われる正しい教え。

方等経典（ほうどうきょうてん）
大乗の教え。

法爾往生（ほうにおうじょう）
阿弥陀仏の願力にはからわれ往生すること。

法の常（ほうじょう）
真理は永遠であるという意。

方便（ほうべん）
・正しい手段。
・「実にして虚しからず」

方便力（ほうべんりき）
相手に応じた手段。

菩薩（ぼさつ）
大慈大悲者

菩薩乗（ぼさつじょう）
「自分だけ救われてもほんとうに救われたことにはならぬ、他を救う行動が自分をも救うのだ」という行動主義。

菩薩道（ぼさつどう）
人は何をめざして生きていくべきか、その為にいかに自ら修行すべきか、また社会の人々の為に何をなすべきかという人間の生き方。

菩薩の四無畏（ぼさつのしむい）

「無所畏の心」というのは「畏るる所の無い心」。

1. 総持不忘――「総べてを持ちて忘れず、法を説くこと無畏なり」。
2. 尽知法薬――「尽く法薬を知り、及び衆生の根と欲と性と心とを知り法を説くこと無畏なり」。
3. 善能問答――「善く能く問答して、法を説くこと無畏なり」。
4. 能断物疑――「善く物疑を断じて、法を説くこと無畏なり」。

菩提心

・仏の悟りに達するまで努力していこうという心。
・菩薩になりたいという心。
・無上正覚の心。

菩提蔵

仏果をさとらせる教え。

ポックリ信仰

ポックリ信仰の縁起は、「往生要集」の著者恵心僧都が母の臨終にあたって、浄衣に着替えさせ、呼吸に合せて念仏を唱えたところ苦しむことなく安楽往生した、という逸話に基づいたもの、といわれています。

その根本には、浄土思想が流れているとされています。

法師

法師というのは、出家の僧にかぎらないのであって出家でもよし、在家でもよし、男子でもよし、女子でもよし、いやしくも仏の教えを信じ、持ちそしてそれを世にひろめる努力をなすものはすべて法師です。

報生三昧

報生とは先天的にそなわっている能力のこと。

八地以上の菩薩は、意志を働かさず、努力をもちいず長時の修行により自然に得たる三昧力をもって、自在に化他の活動をなすことができる。

この三昧をいう。

法性生身の菩薩

法性真如から生じた身をもっている菩薩。

法性常楽の浄利

永遠なさとりの境界である極楽浄土のこと。

法性のみやこ

人間の虚妄分別を超えた存在（法）の真実なるありようを法性といい、それは王者のいる「みやこ」のように仏のいます安穏なさとりの領域であるからこのようにいう。

法身

仏の本体。

1. 法性法身。
2. 方便法身。

仏の智慧

仏というのは仏陀の略であり、ブツダというのは「覚者」ということです。すなわち宇宙の真理を覚った人という意味です。

したがって「仏の智慧」というのは、宇宙の真理を覚った智慧、諸法実相を見通す智慧のことです。

つきつめていえば「真理の智慧」であります。

梵行（ぼんぎょう）
我欲を離れた無漏清浄の行（漏れる事無く清らかな行）

本弘誓願（ほんぐせいがん）
阿弥陀仏が因位において弘く衆生を救おうと誓われた願。

本師本仏（ほんしほんぶつ）
一切の諸仏は阿弥陀仏を師としてさとりをひらいた弟子仏であり、浄土より十方に出現された阿弥陀仏の分身（末仏）であるから阿弥陀仏を本師本仏という。

本生譚（ほんじょうたん）
釈尊の前世の物語でジャータカとも呼ばれる。

凡聖不二（ぼんしょうふじ）
凡夫と聖者がひとつであること。

煩悩

煩悩心とも言って、字の如く「煩い悩む心」のことである。

煩悩成就

あらゆる煩悩を欠くことなく具えている。

煩悩無辺誓願度（煩悩は無辺なれども誓って断ぜんことを願う）

毒となるという貪・瞋・痴の三つの心。

・貪りの心――もっと欲しい、という欲の心、人の物までも自分の物にしたいという、生きて行くのに足りているのに人を傷つけても、時には、法を犯してまでも手に入れようとする心。

なすべきことを怠り、慎みを忘れ、欲望のままに身をまかせてしまう心。

・怒りの心――怒りの心は、数百年をかけて造り上げた大こう高楼をも、一夜のうちに灰燼と化してしまう。

また、争いを起こす。

・愚かな心――夫婦喧嘩から戦争まで総ては怒りの心からである。
――回りの人や物事を正しく判断出来ずに、善意を悪意と受取り逆恨みし、また、甘い言葉に惑わされて身を誤り、自らの行動言語を反省できない愚かな心。
このような三つの悪い心を、一つ一つ捨てていく努力を惜しまない。

凡夫往生
煩悩を断ちきることができない者が阿弥陀仏の浄土に往き生れること。

凡夫直入
凡夫のままで真実報土に往生せしめられること。

法門無尽誓願学
（仏の教えは無尽であろうとも、かならず学びつくそうと誓願する無辺行）
仏の教えは数限りなくあるが、よく学び身に付け、本当のものを見極めることの出来るようになる努力を惜しまない。

◇

まいらせ心

自分が積んだ善根功徳を仏にさしむけようとする自力の回向心。

末代の教行

光明・名号は、末法を救う教えとなり、行となって、行者のうえに実現すること。

末法

仏法が見失われてしまう時代がやってくるのです。それを末法の時代といい、末世ともいいます。しかし、それは、人々の目から見失われたにすぎないのであって、むろん仏法は永遠不滅のものです。けっしてなくなることはありません。

しかも、こういう末法の世にこそ、仏の教えが必要であり、その真価が発揮されるのです。

摩羅記

五官を慶ばせ、正しい善を破り、悪を増長させる魂。

摩利支天

摩利支天は、インドの名マリーンをそのまま音写したもので、その意味は陽炎とか威光と訳されています。この摩利支天も、インド古来の神として登場していましたが、「バァガヴアツドギーター」という古代聖典には風神としてその名がでています。

摩利支天は女神で梵天の子、又は日天の妃とされて、よくその身をかくし障礙をのぞいて利益をます神さまとして信仰されていました。

万行の少善

念仏を多善根、多功徳というのに対し、それ以外のあらゆる行（万行）を少善とする。

未証浄心の菩薩

初地から七地までの菩薩のこと。

この位の菩薩は、まだ自他へのとらわれが残っているので、自利利他するのに作心（強い意志力）を必要とする。

しかし八地以上の菩薩は、一切のとらわれをはなれ、作心をもちいず自在無碍のはたらきをするから浄心

の菩薩という。

微塵劫（みじんごう）

はかりしれないほど長い時間。

微塵の故業（みじんのこごう）

・無数の古い業。
・無始以来の悪業。

密行（みつぎょう）

密行というのは、自分は悟っていてもそれを表に現わさないで、凡愚のごとく人にたちまじりながら、自然と人を導いていくことをいうのです。

密益（みつやく）

行者の表面に明らかにあらわれない利益。
信心の徳としての利益をいう、顕益に対する語。

名一義異（みょういちぎい）
名は一つで同じであっても、その意味が異なること。

冥加（みょうが）
凡夫の方からは見えないけれども、仏祖の加護を被っていること。

妙覚（みょうがく）
菩薩五十二位のうち第五十二位の最後の果位で煩悩を断ち切って悲智がまどかに具わった位。
まことのほとけなり。

名願（みょうがん）
名号願力のこと。

名願力（みょうがんりき）
名号のこと、名号には衆生救済の本願力がこもっているから名願力という。

名義倶異（みょうぎぐい）
語も、その意味もともに異なること。

明行足（みょうぎょうそく）
智慧と行とが共に完全である方。

冥見（みょうけん）
仏菩薩がつねに衆生を見ておられること。

冥衆（みょうしゅ）
梵天・帝釈天・鬼神等、人の目に見えない神的存在。

名体不二（みょうたいふじ）
名号には仏徳のすべてが摂在しているから名号と仏体とは一体不二であること。

名聞（みょうもん）
自らの名誉を求める心。

名聞利養（みょうもんりよう）
名誉欲と財産欲。

名利の大山（みょうりのたいせん）
名誉心や物質的欲望の大きいことを山に喩えている。

冥慮（みょうりょ）
諸天善神のおぼしめし。
凡夫には見えない仏のおぼしめし。

未来機一（みらいきいつ）
未来においては機根は一つだという意味です。

未来教一

未来においてはすべての教えがかならず仏の教えに帰一するのだという意味。

未来行一

現在においては人々の行いは善悪さまざまであるけれども、未来においては、すべての行いが「仏さまのみ心にかなう」という一点において一致するようになる。

未来人一

これも、やはり未来のことを予言してあるのであって、現在は仏の教えを知らない人もあり、それに触れる機会があっても深くはいろうとしない人もあり、さまざまな段階の人がいるけれども、未来においては、かならず、すべての人が仏さまに帰命するときがくるというのです。

未来理一

あらゆる衆生が、仏の教えによって完全に真理に合った生きかたをするようになれば、天上界とか娑婆世界とか、地獄世界とかの区別がなくなって、この世はこのまま仏の世界になるというのです、すなわち、真理はあくまでも一つであるから、未来において、いつかはすべてのものがこの一つの真理のレー

ルの上にのって、完全な調和のある世界をつくりあげることができるという意味です。

弥勒菩薩（マイトレーヤ菩薩）

その弥勒とは「慈しみ深い、友情ある」という意味をもつ梵語マイトレーヤの音訳で、茲氏と意訳されます。歴史的にはイランの太陽神ミスラとその類縁関係にあるヴェーダの契約神ミトラに由来することから、仏教にいたって「契約、約束」に関連する未来仏の性格が付与されたのでしょう。

仏教の教えでは、仏となる資格を持ちながら、現在は菩薩のままで、弥勒の住所である兜率天で修行しているが、釈尊の滅後五十六億七千万年（一説には五億七千六百万年）、人の寿命が八万四千年になったときこの世に降りてきて龍華樹のもとで成道し、釈尊の救いに洩れた衆生を救うとされています。

そのために、釈尊の跡継ぎで、未来の救済を約束された未来仏、弥勒如来ともいわれるのです。わが国の弥勒信仰の初めは、五八四年に蘇我馬子が百済から献上された弥勒仏を石川宅に祀ったという「日本書紀」の記事が最初のものです。

無む

無差別

無畏

・梵語ヴアイシャーラドヤの漢訳。

・無所畏とも漢訳する。

1. 何事にも恐れることのない智慧をもって説法すること。仏・菩薩の徳の一。
2. 仏のこと。
3. 涅槃の異名

無為泥垣

涅槃のこと。

無為の心

自己中心でない心。

無為無漏のさかひ

常住不変であり、煩悩のないさとりの境界。

無縁の慈
平等にして無差別な仏の大慈悲。

無縁の慈悲
一切のものを平等に救う大慈悲。

無我
この世には、自分だけで存在しているものはひとつもないのだから、小さな自我に執着してはならぬということ。

無蓋の大悲
いかなることにもおおい隠されることのない大慈悲心。

無学
煩悩を断じ尽くして阿羅漢のさとりをひらいたもの。

無記（むき）
善でも悪でもないもの。

無行不成の願海（むぎょうふじょうのがんかい）
本願の名号にはあらゆる万行が円満されており成就されない行がないこと。
したがって名号を回向されることでいかなる悪衆生も往生を得ることが可能となる。

無垢輪（むくりん）
煩悩のけがれのない仏の教法のこと。
仏の教法は衆生の煩悩を打ちくだき、次々と教化するのを車輪が回って到る処へ転ずることに喩えている。

無碍光（むげこう）
煩悩に障えられない光。

無碍難思の光耀（むげなんじのこうよう）
何物にも妨げられない、凡夫の思慮を超えた阿弥陀仏の智慧の光明のこと。

無碍人（むげにん）
無碍の徳を成就した諸仏のこと。

無間長時に修すべし（むけんじょうじにしゅすべし）
疑いをまじえず、一生涯念仏を称えよ。

無作（むさ）
あくまでも平等に扱ってゆかねばならぬ。

無慚無愧（むざんむぎ）
人に恥じる心もなく、天に恥じる心もないさま。

無宿善の機（むしゅくぜんのき）
仏法を聞く機縁の熟していない人。

無常（むじょう）
この世には、いつまでも同じ状態でつづくものごとはない。すべては移り変るものだということ。

無上覚（むじょうかく）
この上ない仏のさとり。

無称光（むしょうこう）
説き尽くせない光。

無上上（むじょうじょう）
涅槃の異名。
この上もなくすぐれているという意。

無上大利（むじょうだいり）
このうえもない大きな利益。

無上涅槃
小乗仏教に説く消極的な涅槃に対して、自利利他円満の大乗の涅槃をいう。

無生の生
無生無滅の生。
浄土の往生は生滅（迷い）を超えたものであることをいう。

無上の信心
無上の徳をもつ如来回向の信心。

無上菩提
仏の智慧を得たいという願い。無上最高のさとり。

無上菩提誓願證（菩提は無上なれども誓って證せんことを願う）
限りなく人格の向上に努める。
昨日よりは今日、去年よりは今年、さすがに年だけのことはあると、人様に敬われ慕われるようになる努力

を惜しまない。

無相

・すべてのものの区別を超越した本性
・すなわち実相
・諸法の実相はすべて「空」であること。

無相離念

浄土の事相・仏の相好等を観ぜず、真如法性の理を直接、観ずること。
色もなく、形もない法身真如を観ずる念は無念であるから、法身念仏をこのようにいう。

無対光

菩薩の智慧光の及ばない光。

無等智

ならびなき智慧。

無等等（むとうどう）

阿弥陀仏の異名。

仏の悟りはくらべもののない絶対平等のものであること。

無念（むねん）

・分別的な限定を超えた無相の真如にかなう無分別智のこと。

・無相離念の理観のこと。

・形相をはなれて理を観じ、真理と一体になること。

無辺光（むへんこう）

縁のある全ての衆生を照す光。

無明品心（むみょうほんしん）

一切衆生の愚痴無明の品類に属する心。

無名無実に（むみょうむじつ）

実質（じっしつ）のともなわないこと。

ここでは、名号（みょうごう）の実義（じつぎ）をこころにかけないこと。

無無義（むむぎ）

無義（むぎ）でない語（ご）のことで、仏（ほとけ）のお言葉（ことば）には何一（なにひと）つ無意味（むいみ）なところはないということ。

無問自説経（むもんじせつきょう）

問（と）いがないのに仏（ほとけ）が自（みずか）らすすんで説（と）かれた経典（きょうてん）。

無益の語（むやくのことば）

つまらないことばかりおしゃべりすること。

無余涅槃（むよねはん）

煩悩（ぼんのう）を断（だん）じ尽（つ）くしただけでなく、肉体（にくたい）もまた無（む）に帰（き）したさとりの状態（じょうたい）のこと。

煩悩（ぼんのう）を断（た）ち切（き）ってなお、肉体（にくたい）を残（のこ）している有余涅槃（うよねはん）に対（たい）する語（ご）。

無量光（むりょうこう）
計り知れない量の光。

無量光明慧（むりょうこうみょうえ）
・はかり知れない阿弥陀仏の智慧。

無量光明土（むりょうこうみょうど）
阿弥陀仏の真実報土の異名。

無漏の依果（むろのえか）
煩悩を離れた国土。
漏は煩悩の異名。
依果は衆生の依り所となる環境世界。

無漏無生（むろむしょう）

煩悩のない不生不滅。

明師（めいし）
智慧のすぐれた師。

瞑想（めいそう）
三昧（精神統一）

滅罪得生（めつざいとくしょう）
罪を消して生るることを得る。

滅諦（めったい）
あらゆる煩悩を滅し去ったところ。

毛孔放光（もうくほうこう）
釈迦牟尼仏の全身から美しい光がでたさま。

妄見（もうけん）

みだりのおもひなり

妄念（もうねん）

真理（しんり）に背反（あいはん）した迷（まよ）いの心（こころ）。

聞光力（もんこうりき）

弥陀（みだ）の御誓（おちかい）を信（しん）じまいらするなり。

文殊菩薩（もんじゅぼさつ）

文殊菩薩（もんじゅぼさつ）とは文殊師利菩薩（もんじゅしりぼさつ）（文殊師利法王子（もんじゅしりほうおうじ））の略称（りゃくしょう）で、大乗仏教（だいじょうぶっきょう）で最初（さいしょ）に現（あらわ）れ、最（もっと）も古（ふる）くから尊敬（そんけい）されていた重要（じゅうよう）な上首（じょうしゅ）の菩薩（ぼさつ）です。

俗（ぞく）に「三人寄（さんにんよ）れば文殊（もんじゅ）の智慧（ちえ）」といわれる文殊菩薩（もんじゅぼさつ）は、普通（ふつう）、普賢菩薩（ふげんぼさつ）と共（とも）に釈迦如来（しゃかにょらい）の脇侍（わきじ）として、仏（ほとけ）の智（ち）・慧（え）・証（しょう）の徳（とく）を司（つかさ）どるとされる、仏陀（ぶっだ）の智慧（ちえ）を人格化（じんかくか）した菩薩（ぼさつ）といえるでしょう。

◇

薬師如来

人間と病気、この永遠に切り離すことができない因果関係ゆえに、人は永遠に神仏を治病の一手段として見据えていくのでしょう。

その最高峰に位置する仏さまが薬師如来、お薬師さまの原名は、「ペーサシャルロヘイルリヤバーシバカラージャヤ」という長い名前です。

ペーサシャとは薬、ルロは師、ヘイルリヤは瑠璃色、バーシバは光、カラージャヤは王という意味を持ちます。

これが中国に伝来して漢訳され「薬師瑠璃光王如来」となり、さらに略して薬師如来になったといわれいます。

お薬師さまは、「薬師如来和讃」のなかで、十二の誓願を挙げられていますが、そのすべては人間の日常生活に密着した苦悩を救済するための誓願になっています。

ことにその第七誓願に「衆患悉除」があり、人間の一切の病根を治癒させる、とあります。

これがお薬師さまを病気平癒の仏さまとしてその地位を不動にした所以でしょう。

唯知作悪の機

ただ悪を作ることをのみ知る衆生。

唯仏独明了

ただ仏のみがひとり明らかにさとっているということ。

与奪

他の教義をいったん承認した上で、それを超える自宗の教義を打ちだし、他の教義の本質的意義を奪いとること。

余の仏聖

阿弥陀仏以外の仏菩薩等の聖者。

◇

楽波羅蜜

真の心の平和を得る修行。

羅網（らもう）
宝珠で飾った網。梵本では鈴のついた網。

欄楯（らんじゅん）
装飾をほどこした垣。

利行満足（りぎょうまんぞく）
自利利他の二利の行が満足する菩薩行の完成をいう。

利他円満の妙位（りたえんまんのみょうい）
他力より与えられた功徳の欠けめのないすぐれた仏の位。

律僧（りっそう）
回律を厳守する僧。

立相住心

阿弥陀仏の相好功徳を説いて相好に心を集中して観じさせること。

略解言趣

「仏の寿命は無限である」という、きわめて簡単なように見える教えの中にこめられた大きな意味を理解することは仏の智慧に近づく第一歩であるというわけです。

信仰が進んでここまで達した段階を「略解言趣」と天台大師は名づけられたのです。

竜華三会

弥勒菩薩が、兜率天から、釈迦滅後五十六億七千万年の後に、この世に下生して、竜華樹の下でさとりをひらき、大衆の前で三回説法すること。

流通分

正宗分に書いてあることをよく理解し、信じ、そして身に行えば、どんな功徳があるかということを説き、だからこれを大切にして、あまねく世にひろめよ、そういう努力をする者には、こんな加護があるのだよ、

ということを説かれた部分。

利養

自らの利益を追い求める心。

輪廻

死んでからのわれわれはどうなるのでしょうか。

仏教の教えでは、われわれの生命は、死後も一定の期間は『中有の身』としてこの世にのこっており、その期間を過ぎると前世に積んだ業の果報によって、それにふさわしいところに生まれ変るものと説かれています。

すなわち、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界の十界です。

仏教では、世界はこういう成り立ちになっているとかんじているのです。

それで、もしわれわれが迷ったままで死にますと、その魂はまたもとの「無明」の状態にかえって、もうろうたるままに、また新たに迷いや苦の世界（六道）へ生まれ変りそこでまた十二の段階を通って、老死に至るのです。

そして未来永却にそれをくりかえさなければなりません、このことを輪廻といいます。

流転生死（るてんしょうじ）
三界六道の迷いの世界を生まれかわり死にかわりして流転すること。輪廻。

六境（ろっきょう）
色・声・香・味・触・法

六牙（ろくげ）
六波羅密をかたどったもの。

六種地動（ろくしゅじどう）
天地のあらゆるものが心から感動したことを表しています。

六親（ろくしん）
・六種の親族。

・父・母・兄・弟・妻・子。

六道（ろくどう）

地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天。

六念（ろくねん）

六随念・六念処ともいう。

仏・法・僧・戒・施・天をそれぞれ、他のおもいをやめて、心静かに念ずること、すなわち、念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天をいう。

六波羅密（ろくはらみつ）

布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧。

六和敬（ろくわきょう）

同信者が信仰生活や日常生活のいろいろな面において、お互いにうち解けあい、敬いあっていかなければならぬことを教えられたもので次の六つをいいます。

・身和敬　・口和敬　・意和敬　・戒和敬　・見和敬　・行和敬。

漏尽比丘（ろじんびく）
一切の煩悩を断じ尽くした比丘。

六根（ろっこん）
眼・耳・鼻・舌・身・意という六種の感覚および知覚の器官。

◇

和顔愛語（わがんあいご）
和やかな顔と愛情をこめたことば。

和光同塵（わこうどうじん）
仏・菩薩が衆生済度のためにその威光を和らげて神となり、この世界の煩悩の塵に応同して衆生に縁を結ぶこと。

編著者の思い

現在の世相ほどすさんだ世相はないのではないでしょうか？　親が子を殺し、子が親を殺す。また金を得る目的でガソリンを撒き火を付けて人を殺す。そのような殺伐とした世の中になったのは何故でしょうか？

今聞かなくなった言葉といえば、それは「有難う」の言葉ではないでしょうか？「有難う」とは仏教用語で、有うこと難（かた）し、つまり仏教でいう「一期一会」の言葉であると同時に、感謝の気持ちを表す言葉です。この人や物、行動に対し、感謝の気持ちを持つことにより、人間関係や世渡りの潤滑油となり、自分自身の心が豊かになるのです。心が豊かになれば、人生における四苦八苦の煩悩から脱却でき、希望のある人生設計が描けるのです。21世紀は「心の時代」であるといわれています。「心の時代」とは言っても、十人十色の心があります。十人十色の世界があるのです。

この本は一宗一派に囚われた仏教用語ではないつもりです。巻末に記した参考図書にもあるように、多宗派にわたって著者が読んだ仏教書を基に著者が理明らなかった仏教用語を大学ノートにまとめ、解説を入れ、五十音順に整理したものですが、何分未熟者故、乱筆乱文があると思いますが、この本を手元に仏教書を読んでいただき、お釈迦様が説かれた仏法の教えを、この乱れた世に広める燭灯にしていただければ幸いです。

仏法を理解し広めることで、21世紀が心の時代となり、人が人らしく生き、生きとし生くるものが、生きている喜びを感じることが出来る世の中に変革出来るのではないでしょうか？　住みよい社会、楽しい人生、生きがいのある生活を、我々子孫のために引き継いでいきたいものです。

（合　掌）

仏教とは、本来、悩める現代人が求めてやまない、

「生きやすく生きるための教え」であり、個人的シミュレーションに勝る「真理へのシミュレーション」である。

「戦争や殺し合いは歴史に書き残されるから目立ちますが、その陰で誰にも知られず人を愛し助けてきた慈悲の心を持つ人たちが、殺したり憎悪したりする人よりもはるかにたくさんいたからこそ、人類は生き残っているのです」

ダライ・ラマ

参考図書

一、大法輪五十八巻（平成三年）第七号
一、大法輪五十八巻（平成三年）第九号
一、大法輪五十八巻（平成三年）第十号
一、大法輪五十八巻（平成三年）第十二号
一、大法輪五十九巻（平成四年）第五号
一、大法輪五十九巻（平成四年）第八号
一、法華経の新しい解釈　全　庭野日敬　著
一、図説般若心経　金岡秀友　著
一、佛説無量寿経　巻上・巻下
一、「心が明るくなる、身が軽くなる」　大室了皓　著
一、禮拝聖典
一、浄土真宗聖典

三好寿
牟田和正
村上英幸
村田米男子
村山和子
目良進侯
本山仁
森邦明
森野繁美
焼鳥正ちゃん
安本信明
柳澤毅
山鹿孝之
山上国孝
山口勇一郎
山路裕彦
山下正幸
山田徳男
山田みどり
山中博
横沼進
吉田正勝
吉田正道
吉永和久
吉本良男
渡辺輝美

東芳子
弘中多美男
福島房代
福島洋
福山義樹
藤木信介
藤田武清
藤原嗣典
藤原太平
堀内一輝
堀川憲司
本城三喜男
前河隆文
前野純治
前原貢
前村知昭
升田昭
松永重一
松野実智雄
松本秀敏
水原尊信
溝口波留奈
三村康司
宮川正史
宮崎龍彦
宮武康夫

徳留勲
永井實
中尾千尋
中島美樹子
永谷佳彦
中野俊雄
長野五郎
永松武
中村敏宏
中村奥陸久
中村弘一
新原勝治
西田啓子
西宮浩
新田謙吾
沼口公明
野上一義
野上順子
野村孝之
萩守泰知
橋本幸治
橋本重
長谷川満治
浜崎憲一
原田清範
原田明典

この度は、「仏教用語集」の出版に、ご支援、ありがとうございました。おかげで出版に漕ぎ着けることが可能となりました。
ハードカバーの豪華本という訳にはいきませんが、シンプルで読みやすい本が出来たと、著者をはじめスタッフ一同喜んでいます。
本当にありがとうございました。

「仏教用語集」の出版にご協力いただいた方々

（敬称略）

赤松一信三明
足立信男勉
阿部国省
天本省三
綾織勉之
荒生裕久
池田芳夫
石橋信一
石室屋恵
石本修
井上勝正雄
今村義司
今村栄郎
今村四則
岩本正昇
上田一
上浜洋造
内海榮義
江頭光修
榎木園司
塩田泰太
大久保秋一
尾形彰敏
岡本明志
奥野武努
尾崎義雄
折坂義子
柿本京人
梶原正邦
片山義治
香月広正
株本幸一
神園剛憲
嘉村正昭
狩山勉
川崎達郎
河野典一
菊池一郎
北村富美子
木下文彦
久保康次
久保隆邦
久保幸枝
久保富晋
倉成修
桑野和教
源嶋悦郎
河野耕三
古賀博子
小島正久
児玉洋吾
小松照之
小松正之
小森幸雄
齋野敬子
境時雄
坂口俊明
崎田アイ子
迫忍
佐々木次男
指田紀男
佐矢野茂
澤田幸一
重枝秀隆
篠崎晴夫
篠原健二
志波盛勝
柴垣敏英
志藤英樹
島田聡
島本洋一
首藤光夫
新飼とし子
新野達男
新屋和夫
菅原忠男
杉野静男
洲崎憲一
瀬崎義行
髙木恵美子
高橋浩一
高森英夫
竹内賢
竹下秀夫
竹下モモ工
竹下美和子
竹下弘章
竹下佳孝
竹下佳秀
竹下靖明
立石秀幸
田代民和
田中強
田村紀子
田村清
手嶋留美子
手塚隆
堂下一枝

竹下　博（たけしたひろし）

1948年（昭和23年）　1月15日生　北九州市小倉北区
1966年（昭和41年）　福岡県立小倉工業高等学校機械科卒業
1970年（昭和45年）　私立　福岡大学工学部機械工学科卒業
1970年（昭和45年）　日本国有鉄道九州支社入社
1987年（昭和62年）　国鉄改革に伴いＪＲ西日本移籍

現　在（平成15年）　ＪＲ西日本福岡支社　博多総合車両所
総務科勤務

子を思う　親の心が　阿弥陀かな

有心　仏心　慈悲心

人それぞれ心あり　その心とは
ほとけ心なり　ほとけ心とは慈悲の心なり

竹下　博

仏教用語集

2001年10月30日　初　版　発行
2003年1月31日　第2刷　発行

編著者 —— 竹下　博
発行者 —— 田中久雄
表紙画 —— 吉田令一
編　集 —— 株式会社かんぽう
大阪市西区江戸堀1丁目2番14号（〒550-0002）
電話……(06)6443-2171／FAX……(06)6443-2175

印刷／製本……株式会社 淀川工技社

©2003 Printed in Japan